

目 次

公開シンポジウム 「教養とジェンダー」

趣旨 1

開会の挨拶 4

「外国語（文学）」を読む女たち —— 可憐な生徒から宿命の女へ

平石典子（筑波大学） 6

学校の勉強なんかしない —— 男の特権？

高田里恵子（桃山学院大学） 14

〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか？ —— 教養の拡張と文学の関係

小平麻衣子（慶應義塾大学） 24

《コメント》

水溜真由美（北海道大学） 30

ディスカッション 34

公開シンポジウム 「教養とジェンダー」

趣旨

蔵田伸雄（北海道大学大学院文学研究科教授・同応用倫理研究教育センター長）

「教養」が日本から、そして大学から失われて久しいと、懐古の念とともに（特に男性によって）言われることは少なくない。古典文学や思想、芸術といった「教養」は、純粹かつ崇高で世俗的なものを越えた価値を持ち、人格を陶冶するものだと考えられてきた。ゲーテや岩波文化に代表される「教養」こそが、人間性を真に豊かにするものだと考えられていたのである。また啓蒙主義以降のヨーロッパ、さらに明治期以降の日本の「教養」とは、若者がそれを武器にして、古い因習から自らを解放し、自己を確立するための手段でもあった。特に日本では、多くの場合「教養」は「西洋の文学・芸術や思想についての知識」を意味していたので、外国語にアクセスできるものだけが「真の教養」の持ち主だと考えられていた。そして旧制高校や大学こそが、そのような「真の教養」を（ただし正規の授業の外で）得ることができる場所だと考えられていたのである。また出世に背を向ける「煩悶青年」にとって、「教養」つまり世俗的な価値から自由である文学・哲学・芸術を求めることは自らの人生の意味への答えを探す手段でもあった。

その一方で、このような男性的「教養」を補完するものとして、女学校的な「教養」も存在していた。女性にとって「教養」とは自分たちを古い規範や社会的な束縛から、そして男性たちから解放してくれるものであると同時に、自分の価値を高めてくれる文化資本でもあった。このように「教養」は女性のジェンダー的な自己理解の形成においても、間違いなく一定の役割を果たしてきた。

しかし、このような「教養」観はある種の歪みを含んでいた。旧制高校的な「教養主義」にある種の権力性、男性性、抑圧性、支配性そして女性排除の構造があったことは否定しがたい。「教養」は帝国大学等に進学するエリートの特権階級の男性たちが、自分たちを非エリートから（そして「お勉強ができる」だけの凡庸な世俗のエリートから）、さらには女性から差異化するための道具としても機能していた。「教養」重視の風潮には「語学や知識を教える男性」と「それを教えられる女性」という形で、性的役割を固定化するという側面もあった。「教養」にあこがれる女性たちにとっては、「教養」がジェンダー的規範から自らを解放してくれるものである一方で、「真の教養のとりあえずの主体である男性たち」とどう関わればよいのかということが大きな問題となった。また「西洋の教養」を求める「自由な」女性たちは、文学作品の中で不道德な存在として描かれることもあった。

戦後、大学の共学化や増加とともに「教養」の代表である「文学」は大学で広く教えられるものとなった。そして「文学部」の中で増えていく「勉強熱心な」女子学生たちは、そのような文学教育の中で、正規の教育を批判する機能をもっていた真の「教養」に触れることができない者として揶揄される存在でもあった。

このように「教養」は近代日本の女性・男性のジェンダー規範の形成において大きな、しかしいびつな影響を与えてきたとも言える。「教養」とは固定化されたジェンダー観を隠微な形で再生

産する社会的な装置でもあったと言えるかもしれない。

第二次大戦後の文化の大衆化の流れを経て、もはや「教養」は憧れの対象ですらない。そうであれば、そのような「教養主義」のもつマイナスの側面も無くなったということになる。しかし「教養」はもう人々を解放する力をも失ってしまったのだろうか。「教養」は私たちの固定化されたジェンダー観を崩していく力を再び持つことはないのだろうか。そして大学や高等教育機関は「教養」とどのように関わっていけばよいのだろうか。

このシンポジウムは、そのような疑問に答えることを試みるものである。

登壇者紹介と発表要旨（登壇順）

パネリスト

平石 典子（ひらいし のりこ）

筑波大学大学院人文社会科学研究科准教授。専攻は比較文学。主な著書として、『煩悶青年と女学生の文学誌——「西洋」を読み替えて』（新曜社、2012年）、『異文化理解とパフォーマンス』（春風社、2016年、共著）、『越境する言の葉——世界と出会う日本文学』（彩流社、2011年、共著）など。

日本近代文学がその初期から繰り返し描いてきたのは、男性が女性に外国語（や外国文学）を教える姿であり、それが恋に発展する情景であった。明治文学に描かれた「外国語を使う女性像」の分析から、当時の社会における外国語の位置づけと、女性がそれを読むことが意味するものを考えてみたい。

高田 里恵子（たかだ りえこ）

桃山学院大学経営学部教授。専攻はドイツ文学。著書として、『女子・結婚・男選び——あるいは〈選ばれ男子〉』（ちくま新書、2012年）、『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校』（ちくま文庫、2006年）、『グロテスクな教養』（ちくま新書、2005年）など。

日本の教養（主義）の特徴は、学校の勉強なぞ軽くこなし、そのうえで「自発」的に文学や哲学や芸術を求めること、つまり学校の勉強という殻をやぶることにある。一方殻をやぶことは女性的教養とは結びついておらず、「女の子」の限界が殻をやぶれないことのなかに見いだされてしまう。こうした「自発性」礼賛はいつごろ誕生したのかを考察していきたい。

小平 麻衣子（おだいら まいこ）

慶應義塾大学文学部教授。専攻は近代日本文学。著書として、『夢みる教養——文系女性のための知的生き方史』（河出書房新社、2016年）、『21世紀日本文学ガイドブック7 田村俊子』（ひつじ書房、2014年、共著）、『女が女を演じる——文学・欲望・消費』（新曜社、2008年）など。

近代文学研究は何をやるのかよくわからない、という人がいる。その理由の半分は、文学の研究方法が、大学のありかたに伴う教養観の変化と大きな関係を持っているところにある。研究と教養と趣味の歴史的関係を、ジェンダーの視点を入れて考える。

コメンテーター

水溜 真由美（みずたまり まゆみ）

北海道大学大学院文学研究科准教授。専攻は近現代日本思想史、ジェンダー論。

著書として、『『サークル村』と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、2013年）。

司会・進行

蔵田 伸雄（くらた のぶお）

北海道大学大学院文学研究科教授・同応用倫理研究教育センター長。

北海道大学大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター主催 公開シンポジウム

教養とジェンダー

日時：2017年12月9日（土）13:30～16:30

場所：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟2階 W203 室

開会の挨拶

蔵田：これより、北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター主催の公開シンポジウム、「教養とジェンダー」を開催いたします。

まずは主催者を代表いたしまして、北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター長を務めております、私、蔵田伸雄よりご挨拶を申し上げ、本日のシンポジウムの趣旨について簡単にご説明させていただきます。

本学の応用倫理研究教育センターは、10年余りの活動を通して、わが国の応用倫理研究の発展に寄与し、また国際的な研究ネットワークの形成にも貢献してまいりました。また、本学におけるジェンダー・セクシュアリティ教育において中心的な役割を果たすということも、本センターの重要なミッションの一つとなっております。そして、本センターはジェンダー、セクシュアリティに関してさまざまな問題を学外の皆様とともに考える機会として、毎年フォーラムやシンポジウムを開催してまいりましたが、それも今年で11年目になります。これまで取り上げてきたテーマには、「性差医療」「ドメスティックバイオレンス」「性感染症」「老いとテクノロジー」「異性装」、あるいは「結婚」、そして一昨年の「同性パートナーシップ制度導入を考える」、さらに昨年度の「シティズンシップと市民運動——LGBTをとりまく日本の事情——」などがあります。今回は「教養」あるいは「教養主義」をキーワードにして、男性、女性、あるいはそれ以外のセクシュアリティについて、皆さんとともに考えていきたいと思います。

さて、教養というものはよきものであり、真のエリートである男性は教養を持つと考えられてきました。世俗的な価値から自由である、文学、哲学、芸術の価値は純粋なものであり、それを求めることは肯定され、特に明治期以降の日本では教養は西洋文化の受容として考えられてきました。しかし、そのような教養あるいは教養主義は、女性あるいは男性のジェンダー理解を固定化する機能をもっていたのではないのでしょうか。近代の日本において教養は、男性・女性のジェンダー規範において大きな、しかし歪んだ影響を与えてきたのではないのでしょうか。北海道大学の前身である札幌農学校も含めた、旧制高校的な教養主義の強い環境の中には、ある種の男性性あるいは抑圧性や、女性排除の構造はなかったのでしょうか。そこでは差別的な構造を隠蔽するような“いやらしさ”が隠されていないのでしょうか。さらに、旧制高校的な男性的教養と対になる「女学校文化」における教養も、女性のジェンダー的な自己理解の形成において、それを補完する

機能を果たしてきたのではないのでしょうか。こういった問題について考えることは、教養と高等教育制度、西洋文化の受容、作品を文化として鑑賞するという姿勢そのものを、ジェンダーの観点から問い直すことを意味しています。本日は、皆様とともにそのような問題について考えたいと思います。

まず、シンポジウムの進行についてご説明いたします。

前半では3名の登壇者に、教養とジェンダーについてそれぞれ30分程度でお話ししていただきます。



蔵田伸雄さん

パネルの一人目は、筑波大学大学院人文社会科学研究科の平石典子先生です。平石先生には『煩悶青年と女学生の文学誌——「西洋」を読み替えて』というタイトルの著作もございますが、本日は、『『外国語（文学）』を読む女たち——可憐な生徒から宿命の女へ』というタイトルでお話ししていただきます。

お二人目は、桃山学院大学経営学部の高田里恵子先生です。高田先生は、『女子・結婚・男選び——あるいは〈選ばれ男子〉』『グロテスクな教養』『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校』といった、関連する多くの著作を執筆していらっしゃいます。高田先生には、『学校の勉強なんかしない——男の特権？』というタイトルで、学校の勉強にはない、文学や哲学に価値を見出すという教養主義の特徴についてお話ししていただきます。

三人目は、慶應義塾大学文学部の小平麻衣子先生です。小平先生は、女学生文化の中での女性にとって教養とはどのようなものだったのかを論じた、『夢みる教養——文系女性のための知的生き方史』という本をお書きになっています。小平先生には、『〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか？——教養の拡張と文学の関係』というタイトルで教育と大学、および研究、そして性との関連についてお話ししていただくことになります。

その後、コメンテーターとして、近代日本思想史をご専門とする、本学文学研究科映像・表現文化論講座の水溜真由美先生から15分程度お話ししていただいた後、休憩を取ります。その間に、ご質問やご意見のある方は「ご意見・ご質問用紙」にご記入いただき、受付もしくは会場内のスタッフにお渡しください。シンポジウムの後半は、皆様のご意見を交えた討論を行いたいと思います。前半の後休憩を取り、その後にコメンテーターを交えた登壇者の皆様の討論、そしてフロアの皆様のご意見を交えた討論を行います。長い時間になりますが皆様には今回のシンポジウムをお楽しみいただきたいと思います。

それでは、お一人目の登壇者は、筑波大学の平石典子先生です。

「外国語（文学）」を読む女たち ——可憐な生徒から宿命の女へ

平石典子

（筑波大学大学院 人文社会科学研究科 准教授）

私は比較文学が専門で、著作の中で「煩悶青年と女学生」といった、教養をも含むことを研究してきました。今回こういうお話を頂き、とてもうれしく思います。実は私の両親は北海道出身で、父も母もまさにこの北海道大学で教養主義的な教育を受けました。その北海道大学で私が教養についての話をさせていただくということを、非常に感慨深く思いながら、本日は明治の話をさせていただきます。

1994年10月の『批評空間』という雑誌の共同討議の中で、柄谷行人がこんなことを言っています。

日本の近代文学は、二葉亭四迷でも山田美妙でも、だいたい『女学生』という存在にショックを受けたところから始まっています。異性が知的である、つまり、対自存在としてあるということへの困惑から始まっている。

ここで、「異性が」というのは「女性が」ということで、「女性が知的だということを日本の近代文学は発見した」と言っているわけです。今日のテーマでもある「教養」ということですが、広辞苑の第六版には英・仏語の culture、独語の Bildung のこと、とあって、「学問・芸術などにより人間性・知性を磨き高めること。その基礎となる文化的内容・知識・振舞い方などは時代や民族の文化理念の変遷に応じて異なる」と書いてあります。本日私が考えたいのは、明治の女性にとっての知性と教養とは何だったのか、そしてそれがどういうものを生んだのか、ということです。

まず、「明治女性の教養」の特徴的なところをとらえてみたいと思います。

このスライドにあるのは、18世紀のフランスの絵と、19世紀、江戸時代の歌川国芳の絵です¹。二つとも本を読む女性が描かれています。本を読む女性というのは18世紀のフランスにも、19世紀の江戸時代の日本にもいて、こういう図が描かれているわけです。では、彼女たちが「教養ある」



平石典子さん

1 （図1、次頁）ジャン・オノレ・フラゴナール「読書する娘」（1769）、（図2、次頁）歌川国芳「山海め伝度い図絵、津ゞきが見たい（志州西宮白魚）」（1852）



図1「読書する娘」

File:Jean-Honoré Fragonard 018.jpg

Licensed under public domain via wikimedia commons



図2「山海め伝度い図絵、津づきが見たい（志州西宮白魚）」

File:Kuniyoshi Utagawa, Women 12.jpg

Licensed under public domain via wikimedia commons

女性として描かれていたかということ、そうではありません。この絵の女性たちは、特に知性というものとは関係なく描かれています。女性が読んでいるのはどちらも小説だ、というところが重要です。女性は物語を読むことは許されていたわけですが、それは必ずしも「知的」と見なされることではなかった、ということを押さえておきたいと思います。そして、その状況が変わっていくのが明治時代であるということになります。

明治の女子教育は非常に早く始まりますが、そこには「洋学派」と言われる人たちの活躍がありました。開拓使次官であった黒田清隆等の功績が大きかったのですが、その中で、例えば、明治女学校の初代校長になる木村熊二はアメリカに留学したときに、「日本の女は無学にして、当地（アメリカ）の女と比べ候えば実に気の毒に存じ候」と書いています。「日本の女は無学」であって、だから女性に教育をしなければいけない、啓蒙しなければいけない、ということで、巖本善治は1885年に『女学雑誌』という、女性の啓蒙を目的とした雑誌を作ります。そして、その「発行の主旨」に、「希ふ所ハ欧米の女権と吾国従来の女徳とを合せて完全の模範を作り為さん」と書くのです。そして、その巖本善治が『女学雑誌』の中にフィクション（物語、小説）を書くわけですが、最初のころに発表された女学生が出てくる物語の中では、女学生たちは男性的な言葉を使っています。「田中君今日ハモーモーいやな算術で実に頭脳を労らしたよ」といった具合です。会計学みたいなことを勉強して疲れてしまった、ということなのですが、お互いに「きみ」と呼んだり、「〇〇君」と呼んだりしている。作者の巖本は、「本章は固と学校の女生徒中に行ハる、当世の風体を有の儘に写せし」と書き、実際にこんなふうな話を女学生たちがしていた、と記しています。

ここからわかることは、その初期においては女子の新教育というものが男性と同質のものであった、もしくは同質のものを目指した、ということです。明治の新教育はそのスタート時には、男性と同質の教育を女性にも施そうとしたのです。ところがこれは全くうまくいかず、多くの批判や非難にさらされることになります。

そうした状況が文学の中にどう出てくるかを見るために、二葉亭四迷の『浮雲』という作品を持ってきました。この作品に出てくるお勢というヒロインは、「生得て才澁の一徳」、生まれついて非常に才たけた女の子です。ところが「根生の軽躁者」とも「オチャッピー」とも書かれていて、「流行が大好き」という設定になっています。その中で主人公の文三がなぜお勢に魅かれるのか、その場面をみてみましょう。お勢は、彼との会話の中で「自分にも親より大切な者がいる」と言います。文三はもともとお勢のことが好きで、そういうことをちょっと話しかけるのですが、すると、お勢が「自分にも（大切なものが）ある」と言うのです。文三が「それはだれなのか」と聞くと、「人じゃアないの、アノ真理」と答えます。「真理」という言葉を聞いて、この女の子は何て高尚なことを考えているのだろう、と文三はすっかりお勢のことが気に入るわけです。

ではお勢がどのようにして「新知識」を得ていたか。これは、文三にとっては恋敵にもなる本田との会話の中で出てきます。

お勢さん位の年恰好でこんなに縹致がよくって見ると、学問や何かは其方退けで是非色狂いとか何とか碌な真似はしたがらぬものだけれども、お勢さんはさすがは叔母さんの仕込みだけ有って、縹致は好くっても品行は方正で、曾て浮気らしい真似をした事はなく、唯一心に勉強してお出でなさるから漢学は勿論出来るシ、英学も……今何を稽古してお出でなさる

そう聞かれたお勢が「『ナショナル』の『フォース』に列国史（スイントン）」と答えると、「フウ、『ナショナル』の『フォース』、『ナショナル』の『フォース』と言え、なかなか難しい書物だ、男子でも読めない者は幾程も有る。それを芳紀も若くってかつ婦人の身でいながら稽古してお出でなさる、感心な者だ」と本田が言うのです。

ここで出てくる『ナショナル』の『フォース』と「スイントン」というのは、*National Fourth Reader*とウィリアム・スイントンの *Outlines of the World's History*（世界史概説）の二つです。まず、1863年に出た *National Fourth Reader* というのは、英語の勉強のために作られた教科書です。*Outlines of the World's History*（世界史概説）は中等教育を受けている男子が学ぶもので、それをお勢も勉強しているということになります。ここから分かるのは、「英語」という分野において、この時代には男性と同質の教育が女性にもなされようとしていたということです。

一方で、女学生が学ぶ「英語」は、当時の男女関係に別のものももたらしました。その点について書かれた作品を挙げてみましょう。『浮雲』の次の年に出た、三宅花圃という女性作家の『藪の鶯』という作品です。坪内逍遙が、女学生を活写していると賞賛したこの作品に描かれているのは、『女学雑誌』の中にも登場した、「女権」と「女徳」のはざまで苦悩する女学生たちの姿でした。結局、この作品の中で勝利するのは女徳ということになります。「頑張って勉強する」と言っていた女学生たちは、師範学校には入るものの、「その将来は知るによしなし」と書かれるにとどまりますし、控えめな女学生、あるいは苦勞して弟を育てる女学生が、立派な人と結婚して幸せになった、というような結末が用意されるのです。

この作品の中で注目してみたいのが、「西洋かぶれ」と描かれる篠原浜子という女性です。この浜子が、恋人にだまされてしまって、最終的には敬虔なクリスチャンになる、というのが、物語

の一つのプロットになります。その第1回に、英語をめぐる話が登場します。

まず話題になるのは、「篠原さんのお兄さん」です。この人は浜子のいいなずけなのですが、留学していた「お兄さん」が帰ってくる、という話になります。浜子が「帰ってくると言っていたけれども、面倒くさくて嫌だ」と言うと、友人がこんなことを言います。

「オヤなぜでしょう。あなたおたのしみでしょうにねえ。そうして学校のお下読みや何かしておいただき遊ばすようござりましょう」

つまり、お兄さんが帰ってきたら勉強を見てもらえるじゃない？というわけです。ところが浜子は、「もう私は学校へ行きません」と言って、このように続けます。

「私くしは充分英学を勉強したい気ですから。このごろではあの御存じでしょう。山中というあの人は。学力もありますからたのんできてもらいます」

英学が好きな浜子は、英語を山中という官員に教えてもらう。そしてそのうちに恋仲になる——結局彼女はだまされているだけなのですが——ということがこの物語には描かれています。ここで出てくるのは、女性が英語を男性に教えてもらい、それが恋に発展する、という構造なのです。

もう一つ、「師弟関係が恋愛に発展する」ということがよく書かれているのが、森鷗外の『舞姫』という作品です。

余と相識る頃より、余が借しつる書を読みならひて、漸く趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かゝれば余等二人の間には先づ師弟の交わりを生じたるなりき。

豊太郎は、「エリスとの交際は、もともとは師弟から始まったのだ」と語っています。ここで豊太郎が教えるドイツ語は、エリスにとっての外国語ではないわけですが、この物語が日本ではなくベルリンを舞台にしたものであって、エリスが例えば日本の芸者ではないこと、ふたりがドイツ語での学習を通じて恋を育んだということは、やはりこの時代には重要だったのではないかと思います。

このスライドは、ダンテの『神曲』の「地獄編」第五歌の、パオロとフランチェスカのエピソードを、19世紀の半ばにダンテ・ガブリエル・ロセッティが絵画にしたものです²。ここでは、ランスロットとグィネヴィアの物語を二人で読んでいたパオロとフランチェスカが、初めてキスを交わしています。そこから二人は今で言うところの「不倫の恋」に落ちていくわけですが、外国語の書物を通じたロマンティックな関係を、ダンテも描いていました。そうしたものが、明治の日本文学の中に描かれるようになったわけです。

2 (図3、次頁) ダンテ・ガブリエル・ロセッティ「パオロとフランチェスカ」(1855)



図3 「パオロとフランチェスカ」

File:Dante Gabriel Rossetti - Paolo and Francesca da Rimini(1862).jpg

Licensed under public domain via wikimedia commons

外国語を男性が女性に教える、そしてそこから恋愛関係が生まれる、という物語の発生は、「男女が同じものを学ぶ」という最初の女子教育とは違った形の安心感を社会に与えることになります。師弟関係の中では、女性は男性と「同等」にはなりえず、「恋愛の対象」になるだけだからです。こうした変化を受けて、明治30年ごろからは、新教育を受ける女学生たちが絵画の世界で美しく描かれるようになります。美しい女学生を描いた人と言えば、梶田半古が非常に有名です。この『魔風恋風』の挿絵³のように、当時の女学生は大抵洋風のものに彩られて描かれるわけですが、1906（明治39）年に『文藝倶楽部』という雑誌の口絵として描かれた「杜鵑一声」⁴においては、本を読んでいた女学生が、その本を伏せて、物思いにふけています。ここでも、女学生の知性あるいは教養というものが、男性にとって怖いものではなくなったことが見て取れるかと思います。

それでは、明治文学が描き出した「外国語を読む女」が皆こうした人物だったのかというと、そうではありません。実は男性作家たちはこの後、少し不思議な女性表象をしていくことになります。今度は、男性作家たちの文学的想像力が生み出した、違うタイプの「外国語を読む女たち」を見てみたいと思います。

一人目の作家は、泉鏡花です。泉鏡花は知識を鼻にかけた女性を嫌ったと言われている、「女学生は大嫌いだ」と語った、というエピソードが残っています。彼が1904（明治37）年に『新小説』に発表した「紅雪録」と「続紅雪録」という作品では、女学校で教育を受けた女性が重要な役割を果たします。この女性はいわゆる「悪女」で、主人公である若者を誘惑して翻弄します。主人公の千之助が雪の中に放り出された後に、誘惑者である綾子はこんな風に描かれます。

長襦袢の肩微に円く、もつれ毛の濃い、雪のやうな頸脚を見せて、然もぬつくりとしたやうに裾を長く伸々と寝ながら、うしろから洋燈（ランプ）を受けて、宝玉入の指環の手に、一寸押へ、軽く斜にかざして、横文字の書を見て居た……

枕元にもコップがあったり、ベルモットの瓶があったりしますが、ここで綾子が見ているのは横文字の書、つまり外国語、あるいは外国文学です。このような、外国語の書物に彩られる女性

3 諸般の事情により画像は掲載できません。

4 諸般の事情により画像は掲載できません。

というものが、新たなる誘惑者として明治文学の中に出てきます。

泉鏡花は、新派劇として非常に有名になった『婦系図』の中でも、同じような女性を描き出しています。主人公の早瀬主税が静岡に行って知り合うことになる、河野の妹の菅子という人物がそうで、彼女も、女学校を出た、ある種の誘惑者として造形されています。菅子は「早瀬主税にドイツ語を習うのだ」といって、教本を買ってきます。ここでもやはり、外国語を習う、あるいは外国文学を読むことを通じて男女が仲よくなっていく姿が描かれるわけです。

さて、次に、夏目漱石と森鷗外の作品をご紹介しますと思います。

まず、夏目漱石の『虞美人草』という作品です。この作品のヒロインである藤尾はまさに、洋書と一緒に登場します。「静かなる昼を、静かに葉を抽いて、箔に重き一卷を、女は膝の上に読む」という場面で、彼女が読んでいるのはプルタルコス『英雄伝』の英訳です。そして、顔を上げた彼女は次のように描写されます。

蒼白き頬の締れるに、薄き化粧をほのかに浮かせるは、一重の底に、余れる何物かを蔵せるがごとく、蔵せるものを見極めんとあせる男はことごとく虜となる。

藤尾はここで、彼女が読む『英雄伝』に登場するクレオパトラになぞらえられることになります。クレオパトラは、この時代、「毒婦」という風にも表されていた女性です。藤尾はクレオパトラになぞらえられるだけではなくて、例えば小野との会話の中で「私は清姫のように追っ懸けますよ」と言ったり、「藤尾は丙午である」と地の文で書かれたりします。つまり彼女は、日本の伝統の中の「悪女」としても造形されていることになるわけですが、そこにクレオパトラが加わることで、西洋の「宿命の女」という女性像とも藤尾は重なっていくことになります。

「宿命の女」というのは19世紀のヨーロッパで流行した女性像で、主に性的魅力で男性をとりこにして、男性を破滅させてしまう女性です。歴史上の人物であるクレオパトラや、伝説中の人物であるサロメといった人たちも、19世紀ヨーロッパの文学的な想像力の中で「宿命の女」として読まれるようになっていきます。クレオパトラについては、テオフィル・ゴーティエが『クレオパトラの一夜』で、官能と残酷な冷徹さを兼ね備えた女王であるクレオパトラを描き出しており、漱石もこれを読んだのではないかと推察されます。『クレオパトラの一夜』の中のクレオパトラの描写と、「男を弄んで、一方で一毫も男から弄ばれることを許さぬ女」と描かれる藤尾の描写には非常に近いものがあります。「強い女性」が「外国語を読む女」として描かれるという、興味深い情景がここにはあるといえるでしょう。

もうひとつ、森鷗外の『青年』という作品をご紹介します。これは明治43（1910）年に書かれたものですが、作品中に坂井夫人という未亡人が出てきます。主人公の純一は、ジョン・ガブリエル・ボルクマンの演劇を観に行ったときに初めて坂井夫人に会って、このように言われます。

「あなたフランス語をなさるのなら、宅に書物が沢山ございますから、見にいらっしゃいまし。新しい物ばかり御覧になるのかも知れませんが、古い本にだって、宜しいものはございますでしょう。御遠慮はない内なのでございますの」

その後にもう一度、坂井夫人のことを見た純一は、「坂井の奥さんの謎の目」を発見します。そして、次の章では「坂井夫人の謎の目」は「オオド（Aude）のようだ」と描かれます。「オオド」というのは、ベルギーの作家のカミーユ・ルモニエが1897年に書いた『恋する男』に出てくるヒロインです。官能的な女性であるマオード（オード）は、「インドのヒンドゥー教の踊り子たちの技巧がある」と形容されます。これは、やはりベルギーの世紀末作家、ユイスマンスが1884年に発表した『さかしま』という作品の中で、ギュスターヴ・モローの『ヘロデ王の前で踊るサロメ』の絵から連想するサロメ像にも共通する、異国趣味をかき立てる女性像です。エクゾティシズム（異国趣味）、というのが、当時のヨーロッパでの「宿命の女」表象の一つの特徴だったわけです。

では日本の場合、どうだったかということを考えると、『青年』の坂井夫人もそうですし、『虞美人草』の藤尾もそうなのですけれども、異国趣味をかき立てる存在であることは同じです。ただし、異国趣味の「異国」というのがヨーロッパから見た異国とは違って、日本から見たヨーロッパ、あるいは北アメリカということになります。そして、そこに所属する人たちが話している言葉——英語やフランス語——は、当時の日本から見たときに、「より強い文化が持っている言葉」ということになるわけです。そのような言語の力関係、当時の文化の力関係が、男女関係に反映されているのが、このような明治文学ということになります。「外国語を読む女」、「外国文学を読む女」は、もともとは男性から外国語を教えてもらい、恋愛や結婚の対象となる女性でした。それが男性作家の文学的想像力の中で、少し違う方向に行ってしまったのが、明治30年代の終わりから40年代の始めだったことがわかります。

最後に検討したいのは、このような女性表象を女性たちがどのように受け止めたのか、ということです。実際に外国語や外国文学を読んだ女性の反応を、一つだけご紹介しておきたいと思います。

今回ご紹介したいのは、大塚楠緒子という作家です。この人は裁判官である大塚正男の長女として生まれて、幼いころから和歌を学び、東京女子師範附属女学校を主席で卒業しました。そして、小屋保治という美学者と結婚した後、自分も文学を書くようになります。漱石にも文学を習ったりしていて、漱石との関係で語られることも多い女性作家です。彼女が1906年に『晴小袖』という非常にきれいな本を出すのですが、この本には、夫が美学者だったということもあって、西洋絵画がたくさん収められていました。彼女はメーテルリンクの翻訳もしています。誰かに手伝ってもらった可能性もありますが、日本で初めてのメーテルリンク作品の翻訳は、大塚楠緒子の名前で出ています。

実際に外国語、外国文学を読んでいたこのような女性は、自分の作品の中でどんなことを書くのでしょうか。『晴小袖』の次の年に出た『露』という作品で描かれているのは、高等教育を受けた女性の夢と挫折です。夢と挫折ということでは、三宅花圃の『藪の鶯』とも近いわけですが、この小説で面白いのは、その中に、当時の男性たちが描き出した女性表象への、批判めいたものが出てくるところです。例えばクレオパトラについては、主人公の一人の少女がもう一人に向かって「田住さんは実に美人だわ、貴女は、そら、何時か西洋の雑誌に有ったクレオパトラの絵ね、あの顔に似ていらつしゃるわ」と言うと、言われた方は「厭よ、島川さん、クレオパトラだなんて、妖婦（コケツト）じゃありませんか、似て居るなんて酷いわ」と返します。

あるいは、「文学と女性」という講演でサッフォーについて語りに来た、神坂博士のことを話す場面では、彼女たちはより辛辣です。二人は彼のことを理想の人と思っていたわけですが、どうもそうではないらしい、ということが分かります。なぜかというと、「あの人は海外へ行って、四歳に成る女の児の有るのも構はず、置いてきぼりに為て、情婦には沙汰なしで、日本へ逃げて帰つて来た」ということを知るからです。

これは実は、女性が読む『舞姫』と『虞美人草』ではないかとも思われます。『虞美人草』の藤尾は、クレオパトラと評されたわけですが、「クレオパトラは男性を誘惑する妖婦（コケツト）ではないか」と言って、自分と重ねられることを拒否する。「四歳に成る女の児の有るのも構わず……逃げ帰つて来た」男性知識人については、二人の少女は、「男といふものは、何故、此様に信用が置けないのでせう」、「口に聖賢を説いて、行は魔道を荒む学者」だと痛烈に批判します。これは、『舞姫』の豊太郎批判とも考えることができるのではないかと思います。男性が文学作品の中で書いた女性像というものは、あくまでもファンタジーの中のことで、実際の女性たちには必ずしも影響しなかったのかもしれませんが、しかし、大塚楠緒子を書いたような作品が、1911年に発刊される女性による女性のための文学雑誌、『青鞥』に勇気を与えるようなものだったとも考えることができるのではないかと思います。

駆け足で見てまいりましたが、明治の教養ということを考えたとき、そこには「新しい女性」の教養としての外国語と外国文学がありました。ただし、「男性と同質なもの」と言いながら、男性と同じことをやろうとすると批判される。そこでどうなったかということ、男性から教授を受けてそこに恋愛が発生する、ということで正当化される女性の教養というものがあったことがわかります。

一方で、当時の日本からしてみれば、教えられる外国語は「強者」の言語であり、西ヨーロッパや北アメリカで話されていたものです。そういう欧州言語を話す女性、読む女性が今度は、「悪女」や「宿命の女」といった、「強い女性」表象につながることになります。これはあくまでも、ファンタジーの世界において、ということでしたが、そのファンタジーを受けて、外国語を読む女性、外国文学を読む女性が発信していくことになったわけです。そういう意味では、ファンタジーは何らかの力を女性たちにも与えたのかもしれませんが。

その後どうなるのかということについては、この後続く、高田先生、小平先生のお話を楽しみにしたいと思います。（拍手）

蔵田：ありがとうございました。後のお二人に続くようなお話であったと思います。

それでは、次に高田里恵子先生から、「学校の勉強なんかしない——男の特権？」というタイトルでお話いただきます。

学校の勉強なんかしない——男の特権？

高田里恵子
(桃山学院大学 経営学部 教授)

最初に、スライドにありますように「女が『学校の勉強なんかしない』という心性（メンタリティー）と無縁な理由」について話していきたいと思います。

まず、教養主義をどのように私がとらえるかということですが、ここではあえて、教養と教養主義というのをほぼ同じように考えたいと思うのです。先ほど蔵田先生のほうから、「教養主義というのは、哲学とか文学とかを通して、自分の人格を高めていくようなこと」というお話がありました。その昔、教養主義の全盛期によく読まれた作品といたしますと、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』がありますし、昭和10年代になると漱石の『こゝろ』などがあり、これらが教養主義的読書の代表的な作品とされています。しかしながらよく考えてみますと、『ウェルテル』は横恋慕する困ったさんの話ですし、『こゝろ』も、主人公が別段いい人なわけではなく、こんなものを読んで人格が高められるか、といった作品です。そもそも人格が高められるといい人になるということでもありません。例えば『ウェルテル』が訴えかけるのは、世間とか道徳、因習を打ち破って自分自身というものをつくる、ということです。『こゝろ』もそうです。悩んで、悩んで、悩みの中から自分というものを発見していく、ということです。

教養って何だろうと聞かれて、それに答えるのは本当に難しいことですが、一つ私が言えそうなのは、『ウェルテル』と『こゝろ』の例を挙げましたように、教養とは「自分というものを持つ」ことであるということです。教養は「自分で考える」、ドイツ語で言いますと *selbstdenken* ということと結びついている。こうした教養は、元は啓蒙主義から出てきていまして、啓蒙主義は「解放」ということに結びついている。解放されて、自分自身をつくっていく、獲得する、ということです。今日は、初めは男子の話が中心になるのですが、日本の女子が解放されるのは第二次大戦後です。解放ということなしに、この意味での教養は考えられない、ということが一つ、今日の話のポイントとなります。そこでまず、旧制高校を中心とした教養主義の話をいたします。旧制高校はまさに教養主義の発祥の地です。

旧制高校は約60年の歴史があります。皆さんにお配りした資料の「引用文章一覧」に、「〇〇年に一高に入学」といったことがいちいち書いてあります。書いていてわれながら本当にいやらしいと思うのですが、この記述でそれぞれどういう人か、どの年代の人か、ということが分かると思います。

題名に書きました「学校の勉強なんかしない」ということについて説明します。旧制高校は、初めは入るのがそんなに難しくなかったのです。しかし入りたいという人がどんどん増えてきたときに、受験競争が厳しくなるわけです。そしてどんな受験であってもある程度は暗記ですから、受験を突破する人というのは多分、暗記力が強い人だと思います。そういったある程度のガリ勉

を経て、旧制高校に入る。しかしその後、自分は単なる秀才ではない、単なる優等生ではない、単なる受験の勝者ではないというところで、自分の殻を破ろうとして、「学校の勉強なんかしない」というスタンスで、いろいろな文学作品を読み、哲学書に接する。それは学校の正課のカリキュラムではありません。これはよく「エクストラカリキュラム」と言われます。



高田里恵子さん

『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生

文化』の竹内洋先生や、山崎正和先生、同じく

京都大学の稲垣恭子先生などは、「高等女学校の文化というのは、ハイカラで、ガリ勉とは違った文化である。それに対して旧制高校の教養主義というのはガリ勉文化だ」といったことを言っています。つまり、高等女学校の生徒には初めから勉強なんか求められておらず、「学校の勉強なんかしない」というメンタリティーとは無縁、というわけです。補足して言えば、教養主義はガリ勉文化なのではなく、ガリ勉が基底にあって、それを破っていくという学校文化なのではないかというのが私の見解です。

「学校の勉強の勝者、立身出世の可能性のある者たち」とスライドにあります。当時はまだ、受験の勝者と立身出世は結びついていました。しかし、今は違います。受験の勝者みたいな人は一応いると思います。しかしそれが、立身出世と結びついてはおりません。就活は必ずしも学歴とは関係ありません。また、就活で勝ったとしても、東芝みたいなことになるかもしれないし、先のことは分からない。ですから、受験の勝者というのは現代にもあるかもしれないけれども、受験の勝者と「学校の勉強なんかしない」というメンタリティーとの結びつきは、今の若い人にはなかなか通じるものではないかもしれませんね。しかしある一定の時代まではあったと思います。例えば大正教養主義の全盛期には、哲学とか文学とか、学校のカリキュラムにはないものを読む。学校の勉強はしないでそれを読む。やがて昭和初期には、いわゆるマルクス主義時代が来ます。そのときにはマルクスの文献を読む、ということです。

教養主義の終わりは1960年代の末ごろだと言われますが、当時は学校の勉強なんかしないで、政治とか学生運動とかにかかわる。あるいは、漫画に没頭するということかもしれません。よく考えてみたら、『若きウェルテルの悩み』より、『あしたのジョー』のほうがよっぽど人格を高めるかもしれませんよ。(笑い) いずれにしろ、学校の勉強なんかしない。そして、私の考えとしては、最後の教養主義というのはいわゆるニューアカではないかと思うのです。そのときは私もつい、分かりもしないくせに手に取ってしまったデリダとかドゥルーズといったものが、「学校の勉強なんかしない」に当てはまっていったのではないのでしょうか。そこが最後でしょう。お若い方々には、学校の勉強なんかしない、学校以外の勉強をすることで自分の殻を破る、といっても、なかなか通じにくいかもしれません。そこに越えられない、深い深い川があるかもしれないというのが心配なのですが、それは後でまた話していきたいと思います。

さて、このスライドに「それは藤村操からはじまった」とあります。約60年の旧制高校の歴史がありますが、1900年前後に「学校の勉強なんかしない」という文化が始まったのではない

かと私は考えています。そもそも、教養主義文化がどのぐらいの時期から始まったかという、1900年ぐらいではないかと言われています。これは別に私が考え出したことではないです。ただ、1900年前後のことを、ちょっと違う視点から見てみようというだけです。藤村操は、華嚴の滝で投身自殺した人です。1903年5月、彼が一高の1年生のときです。何となく入学してすぐに自殺してしまったように思いますが、そうではありません。もうちょっとで3学期が終わるといふときでした。つまり、1年生の最後です。というのは、当時は6月まで授業があつて、9月から新学期なのです。この1900年前後は、平石先生のご著書の題名にあるように、いわゆる「煩悶」ブーム、すなわち学生が悩み始めた。これも理由があつて、日本の制度が固まってきた、立身出世の可能性もそれほどなくなってきた。あるいは、いつ植民地になってしまうか分からないというような日本の危機も去って、そのときに初めて、青年の間に純粹に「苦しむ」「悩む」ということが始まったと言われています。これもよく言われていることです。また、学校制度も比較的固まってきました。

（旧制）高等学校という名前になったのが、1894年です。例えば夏目漱石の「落第」という談話があるのですけれども、自分のときにはまだ、学校制度がちゃんとしていなかった、「学校は非常にゴタゴタして、随分大騒ぎだった。それがだんだん進歩して、現今の高等学校になったのであるが」と言っています。そうすると、1900年前後に旧制高校に入った人のころには、受験して入学し、ちゃんと卒業して帝国大学に行くといった制度がほぼ固まり始めたのです。夏目漱石は、あれよあれよという間に何となく帝国大学の学生になったという感じです。それに対して1900年にはもう、完全に学校の制度ができ上がってしまいました。受験制度もでき上がってしまっているという時代でした。

藤村操は「人生、これ不可解」といって華嚴の滝に飛び込んだわけですが、その二、三日、一高の英語の教師をしていた夏目漱石が、教科書も出さなければノートも出さない、予習もしてこないというので藤村を叱った、というエピソードが伝わっています。藤村は学校の勉強というのをそういうふう拒否していたらしいのです。今日は夏目漱石の101年目の命日ですが、そんなことで夏目漱石も藤村操の自殺については随分気にしていたという説もあります。

いずれにしろ、安倍能成、阿部次郎、岩波書店を作る岩波茂雄、野上豊一郎、中勘助など、藤村周辺の一高生がやがて漱石の門下生となり、岩波書店が『こゝろ』を自費出版することによって伸びていきます。同じく、阿部次郎、安倍能成を中心として哲学叢書を出し、それが売れてきて、大正教養主義を先導するわけです。岩波書店は昔は弱小出版社で、それこそまだ大学に就職できていない阿部次郎や安倍能成を使って、現在の雑誌『思想』の前身となる『思潮』を作らせました。もう一度言いますが、大正教養主義というのは、藤村操周辺の一高生がやがて大正中期に大学教師となって本を書いて、それを旧制高校生が好んで読むという、そんな形になっています。

さてここで、「学校の勉強なんかしない」という発言をまとめておきましたので、それをざっと見ていきたいと思います。

①「昭和18年 一高卒・東大入学組」というのは週刊誌の記事の一部ですが、「学校の勉強をするのは恥」というのが旧制高校の文化であった、と紹介されています¹。そして、尊敬され

1 「学校の勉強をするのは恥」「びりに近い方は、低空飛行をしながら不時着しないでいられるのはなかなか大物だというのである」（「昭和18年 一高卒・東大入学組」『週刊文春』昭和51年9月30日号）

るのは、競馬のブービー賞ではないですけども、ビリから2番目ということです。ビリに近くて、低空飛行をしながら、しかし落ちない——こっちのほうによっぽど才能がある、ということなのです。学生同士でコンパをしたときには成績が1番のやつは多くお金を払うという形で、「成績が低いほうが大物」という考え方なのです。本当にいやらしいですけども。(笑い)

②の瀧川幸辰氏は瀧川事件で辞職に追い込まれた京大教授ですけども、「大学と教授と学生」という文章を書いていて、そこには三木清の有名な論考「学生の知能低下に就いて」というのが含まれています²。そこに「高文学生」「キング学生」という言葉が出てきます。高文というのは高等文官試験のことで、高等文官というのは今で言えば、財務省に入って国税庁の長官になった佐川某とか、そんな高級官僚のことです。(笑い)「高等文官試験に受かりたい」というのでその勉強しかしないのが「高文学生」です。それと「キング学生」ですが、『キング』というのは大衆向けの月刊誌の名前です。とにかく大衆が読むような『キング』しか読まない学生、ということです。これは、哲学書も文学書も読まない無教養な学生と、高等文官試験の勉強しかしないガリ勉学生を同じものとして批判しているわけです。そして、瀧川教授は「『無駄勉強』のもたらす効果が重要」と強調しています。

もう一つは、昭和の初期に一高生になった高見順さんの『風吹けば風吹くがまま』という自伝的な小説ですけども、そこに佐井という同級生が出てきます。ちょっと読んでみます。

「そうして見たところ病的なのだが、教室へきちんきちんと出席してノートを克明に取り、病室でもこつこつと勉強している。これは病的でない几帳面さ、これも軽蔑と反感を買っていた。そうした佐井を私も皆に劣らず軽蔑し、軽蔑されながらもかまわず自分を通して佐井の弱々しい図太さに、これは私だけの感情かもしれないが妙にいらいらさせられ、時に憎悪さえ覚えさせられた」³

これは要するに、「学校の勉強なんかしない」という同調圧力が、いやらしいまでに強いわけです。こうやって、こつこつ勉強するなんていうのはみんなに軽蔑される。だけどこの佐井というやつは「そんなのへいちゃらだ」という態度を取る。すると、高見順の何重にも何重にも渦巻いた自意識の中で、「この強さがかえってうらやましい」という気持ちになるのでしょうか。これは本当に、いわゆるエリート校の「学校の勉強なんかしない」という文化を大変よく伝えていると思います。今だって、東大などはどうか分からないのですが、灘高とか麻布とかいうのはきっとこうだと思います。このぐらいいやらしい、嫌な学校だと思います……多分ね。(笑い)

大佛次郎は、「しかし一高へ来て、唯、勉強をして学科の点数ばかりを多く得ようと云うなら、向陵の三年は無駄だ」⁴と言っています。この余裕が、高等専門学校……今の専門学校ではありません、今の東京工業大学のようなところを言いますが、この余裕が専門学校にはない、と大佛は言います。東京工業大学は今、池上彰先生が「教養を高める」などと言っていますけれども……。

2 「世俗的な眼からは怠け者に見える」「自由な学生のみ自己の意志に基く義務として、道徳的責任において勉強する」「『無駄勉強』のもたらす効果」(瀧川幸辰「大学と教授と学生」『現代学生論』(矢の倉書店、1937)(三木清の有名な論考「学生の知能低下に就いて」を含む。三木は「高文学生」「キング学生」を批判))

3 高見順(1924年一高入学)『風吹けば風吹くがまま』(1951未完)

4 大佛次郎(1897～1973)(1915年一高入学)『一高ロマンス』大正5年2月号から大正6年8月号まで『中学世界』に連載

さて、「学校の勉強なんかしない」というのが1900年前後に始まったと言いましたが、そうしたメンタリティーが一体どのぐらいの時代まで存在したのか考えてみましょう。ところで、上野千鶴子さんが前にシンポジウムにいらしたということですが、『以文』という京都大学の同窓会雑誌に上野さんがこんなことをお書きになっています。

「ウエノさん、学生時代は何をして過ごしたんですか、と若い人に聞かれると、そうね、麻雀とセックスね、と答える。覚えたのはこのふたつ、どちらも時間がつぶれた」⁵

上野さんはいわゆる「全共闘世代」だと思うのですが、この時代は女子にも「学校の勉強なんかしない」という人がいたということです。この話が冊子になったとき、あたかも私が上野千鶴子さんを責めているみたいなので、ここはカットになるかもしれません。(笑い)

「大学で教育を受けた覚えはあまりない。自分が授業に出なかったので、毎回はじめに授業に出てくる学生さんの気持ちがわからない。京大では教師に教える気持ちがなかっただけでなく、学生にも教わる気持ちがなかった」⁶

「こういう教育では異才、奇才は育つが、秀才は育たない。しかも、分止まりが悪い」⁷

私は今、京都大学の自画自賛の言説を集めているのですけれども……。 (笑い)

山中さんがノーベル賞を取ったとき、彼自身は非常に冷静にしているのに、隣で松本京大総長がニヤニヤとうれしそうにしていました。それを見て、「山中さんは京大出身じゃないだろ」と言いたかったぐらいです。まあ、奇才、異才を育てるのが京都大学なのだ、ということです……。

⑤に中野好夫さんの三高賛歌を入れておいたのですけれども、そこでも「学校の勉強をしないだけではなくて、学校が教育をしない」というのです⁸。これ、本当に「京都大学系」が多いですよ。

⑦の浅田彰さんのインタビューもそうです⁹。「だから、大学に行って授業を受けたという経験がほとんどなくて……」ということです。

それで、私から見たらちょっと若い、⑧の國分功一郎さんと白井聡さん、そのお仲間にもう一人、『勉強の哲学：来るべきバカのために』を書いた千葉雅也さんがいますが、彼らも「学校の勉強以外のものをするのだ」という考えなのでしょうか。これは読みます。

「私や白井さんは政治経済攻究会という勉強会サークルに入っていて、大学の授業にはまったく出席せずに勉強していました。そこでマルクスもプラトンもルソーもホッブスも読んだ。しかし、このモデルを今の学生に適用することはできません。確かに今の学生はそういう仕方勉強するのは苦手です」¹⁰

5 上野千鶴子「人生を変えた日々」『以文』60 (2017年)

6 同上

7 同上

8 「そしてその私にあたかも目から鱗の剥げ落ちるように新しい目を開いてくれたのが、自由な三高の空気であった。詳しく書いている暇はないが、それがやはり徹底した、教育をしない教育、教育を強要しない教育であった。そして真の意味の自発的内発的な好奇心、人間形成への探求精神が、湧然と湧き起るのは、実にそうした自由に溢れた場を描いてないということを、特に声を大にして言いたかったからである」(中野好夫(1903～1985)(1920年三高入学)「教育」をしない教育が一番よい(1958)『文学・人間・社会』(文藝春秋 1976年))

9 「だから、大学に行って授業を受けたという経験がほとんどなくて、教養科目は授業に出ずに試験だけ受けたし、専門のほうはそもそも授業がなかったとか、つぶしたとか……(笑)。だから公式のカリキュラムで勉強した部分はすごく少ないんです」「受験体制下では文部省の決めたカリキュラムにしたがって規格化された知識を一方向的に与えられる。そういう受験のプロセスは適当にクリアすればいいと思うけれども、クリアしてしまったらもうそういう枠組みにとらわれる必要はまったくないわけで、自分で疑い、自分で考えたほうがいい」(浅田彰インタビュー『セリオ』No.12 (増進会出版社、1993年4月))

10 「教員は働きたいのであって、働くふりをしたいのではない」『現代思想』vol.42-14 (2014年10月)

だから、國分さんのあたりまで、学校の勉強はしないでエクストラカリキュラムで読書会をする、というメンタリティーがあったのでしょう。

そして、「ある世代の教員は、学生に『不良であれ』というようなことを言っている。『授業なんて出るな』と言う人もいます。最低だと思います」と國分さんは続ける。

実際にこういう人がいるのです。ちょっと世代の上の人が、「何か君たち、どうして授業に出るのかな。自分たちで本を読むというのが大事なんじゃないのかな。僕の話なんか聞いたって、つまらんよ」とか言って……想像ですよ。(笑い) そういう感じで、ある時代まで「学校の勉強なんてしない」「大学は教育なんかしない」という雰囲気がたしかにあった。自主自立ということです。それが1900年の藤村操の同級生あたりのところから始まったのではないかと、というのが私の考えです。

ここで、⑪の引用です。那珂博士というのは藤村操の叔父ですけども、この叔父も「(操は)学科の勉強はしないで、専ら哲学宗教文学美術等の書を研究していた」と言うわけです¹¹。

それから、藤村操の同級生の安倍能成の思い出記。「『人生に煩悶する』というのが当時の多感な青年の流行になった。それ以来『定められたるを定められたる如くする』のが、真面目ではないという考えから、学校の課業を怠り、自分の読みたいものを読み、自分のしたいことをするのがいいという気分が、私を支配した」¹²それで安倍能成は落第するのですが、学校全体でもそうで、藤村操の同級生が17名、2年生のときに落第してしまったというのです。ちなみに、岩波茂雄は藤村操より1級上なのですけれども、落ちてきて、安倍能成と一緒にしてもう一回落第して、一高を去ります。では旧制高校は卒業しにくかったかという、そうではありません。むしろ卒業しやすいのです。

⑬で南原繁が書いているように¹³、実は旧制高校では新しい勉強なんかしないのです。「旧制高校が消えてしまって、日本のエリート教育がなくなった」とすごく悲しむ老紳士たちが多いのですが、でも、「こんな無駄な3年間は要らないのではないか」といって、「旧制高校廃止論」は戦前からずっとあるのです。それが最後の最後、戦争に負けた後の学制改革で実現したというだけで、必ずしもアメリカがエリート教育をつぶしたわけではありません。ですから、本当に、意図して落第しなければ落第しないのです。そして、現在の大学みたいに、点数の高下駄だっただけで履かせて単位を与えてしまうわけです。北海道大学はきっと違うと思いますが。(笑い) そんな形で、決して落第しやすいものではありません。落第というのはむしろ、自ら計画しないとできないぐらいです。

では何故、学校の勉強、すなわち「定められたることを定められたる如くする」のは嫌だという雰囲気が出てきたかという、1900年前後のちょうどこの時期に「詰め込み主義批判」とい

11 「学校の科目は、力を用うるほどの事にも非ずとて、専ら哲学宗教文学美術等の書を研究して居たりしが」(「那珂博士の甥華嚴の瀑に死す」『万朝報』1903年5月26日号)

12 安倍能成(1883～1966)(1902年一高入学)「落第と落第の前」辰野隆編『落第読本』(鱗書房 1955年)

13 「正直な話、あの三年間というのは僕も知ってるけど、遊んだものですよ。やる内容といえ、中学校で習ったものを少し手直したような——国語にしても、歴史にしても、漢文にしても。遊んだんですよ。余裕をもったということです。そうすると自ずとそこから人間が伸びたという気になった。いい点もあったろうし、悪い点もあったでしょう。ただ、どっちにしても人間をつくる。単位なんかにとらわれずに、もっと自由に人間をつくる。それが教養の目的だと思います」(南原繁(1889～1974)(1907年一高入学)『聞き書 南原繁回顧録』(東京大学出版会 1989年))

うのが流行っていたのです。これと連動しています。だから、詰め込み主義とか暗記だけでは駄目なんだという批判を、もう 100 年も言っているのです。ただし、エリート教育に関しては詰め込み主義ではだめなんだ、ということです。これからは自主的な人間をつくらないとだめなんだ、ということです。これは、今の文部科学省の言っていることではありません。100 年前の話です。大正時代に、例えば成城学園とか成蹊学園みたいな、欧米の自由教育（Liberal education）の影響を受けて、詰め込み教育はだめだという小学校とか中学校が出てきます。しかし、成蹊とか成城というのは安倍首相も出ているようなところでブルジョワ的な学校ですから、ちょっと話が違います。1900 年前後の詰め込み主義批判というのは、まずはエリート教育、高等教育の中で詰め込みはだめ、という話なのです。そこで、⑭を見てください。

加藤弘之は帝国大学の第 2 代総長でもあるのですが、当時の実学主義の盛んなときに、むしろ文学部みたいなものを応援していた人です。にもかかわらず彼は、藤村操が「人生、これ不可解」と華嚴の滝に飛び込んだことを、「十七や十八の少年が、僅かばかりの研究をして、其れで早くも人生は不可解と断じて、あたかも有為の身を自ら殺す杯とは、実に寧ろ生意気、否狂気の沙汰たるを免れ得ない」¹⁴と怒っているわけです。加藤は、「詰め込み主義はいけない」と当時の教育者が言っているのがむしろいけない、と主張しています。「これ〔教育は所謂詰込主義では不可ない〕一応甚だ道理の如く思われるが、併し此が抑も謬見と言う可きもので、余輩は何処迄も詰込主義——最も過度では不可ないが、適当に為る時は或程度迄は、却て此主義、換言すれば即ち唯だ学ぶと言う方が宜い」¹⁵というわけです。とにかく、この「詰め込み主義批判」が重要視するのが自主・自律・自修であり、これの基盤となるのは自由です。加藤は、あまり自由過ぎるのもどうか、という意見なのでしょう。

それでもう一つ言っておきたいのですが、戦前に高等教育を受けるということは、現在よりも非常に大きな意味をもっていました。立身出世できるという意味ではないです。そうではなくて、世間や地方の因習的なつながり、家族の縛りといったものから解放される唯一の手段は、東京で、あるいはどこでもいいのですけれども、都会で高等教育を受けるということでした。ですから、当時としては高等教育の意味は、本当に「イコール解放」だと思っていいでしょう。もっとも自分自身を解放する、というような意味です。そしてここで、「あえて文科、文学部へ進学する」ということを取りあげます。これは「学校の勉強なんかしない」という心意気の継続なのです。

もう一度、藤村操の同級生たちに戻りますと、当時はまだ、志望者がもともと少ない帝国大学文科大学、すなわち文学部や、法科大学も全部無試験でした。出世したければ、何と言っても、東京帝国大学法科大学だったわけですが、この法科大学こそが詰め込み主義、ただただ写せばいいという筆記学問や暗記主義の牙城でした。それで、阿部次郎も和辻哲郎もほぼ一番みたいな形で一高に入るのだけれども、あえて文学部に進む。それは、出世主義というか、法学部の筆記学問、暗記主義みたいなものを拒否するというメンタリティーの継続を意味したわけです。

そこで、⑮の引用ですが、安倍能成の思い出です。

「〔阿部次郎の〕同じ組には秀才の誉れ高かった鳩山秀夫があり……」¹⁶

14 加藤弘之「青年と哲学」『成功』第 2 巻第 5 号（1903 年）

15 同上

16 安倍能成『我が生ひ立ち』（岩波書店 1966 年）

鳩山秀夫というのは、鳩山由紀夫のじいさんの弟です。これが空前絶後の秀才と言われていました。兄の鳩山一郎も東大法学部です。にもかかわらず、「賢弟と愚兄」と言われたぐらい、秀夫は秀才だったそうです。

「……鳩山（秀夫）は常に首席で、阿部は二番だったが、阿部は教場ではよく居眠りをして居て、試験勉強もしないで、この席次を失わないのが、皆から羨まれて居た」¹⁷

もちろん尊敬もされていた、ということです。鳩山などは秀才であっても、だめなのです。阿部次郎は、当時としても就職に不利な哲学科を、あえて選ぶわけです。

もう一つ見ていただきたいのが、東大の総長を務めた林健太郎です。彼が一高の教師になって、「自由の孤城に住みて」という文章を書いています。「自由の孤城」というのは一高のことです。一高だけではないのですが、旧制高校の教員の6割が文科、文学部出身で、あとは理科（理学部）です。要するに、林健太郎に言わせると、一高は次のようなところだったということです。

「自己の境涯に生きることを第一義とし、学外においても学内においても地位とか権力とかに対して何等の志向を持たないことにおいて、曾ての反俗と自恃の伝統が依然脈々としてここに流れていた」¹⁸

だから一高って素晴らしい、と林は言っていますけれども、随分いやらしいところだなという話です。そしてこれは、教養主義の一つの特徴だと思います。「反俗と自恃の伝統」を受け継いで、林健太郎は東大総長になっているわけです。

言っておきますけれども、和辻は東大、安倍能成は京城、阿部次郎も東北ということで、3人とも一応は帝国大学の教授になるわけです。そうすると、「学校の勉強なんかしない」ということと、しかし学校にいるという——これは絶妙な位置なのです。（笑い）だからといって、在野の人間になるわけではない。夏目漱石も、「学校の勉強なんかしない」という感じで帝大を辞める。でも、実は学校と分かちがたく結びついている。何と言っても、教科書の定番になるわけです。この絶妙な位置というのが、教養主義において非常に重要である。

さて最後の最後に、やっと今日のテーマの「ジェンダー」が出てきます。

スライドの「女が『文科』に成績主義をもちこんだ」というところを見てください。文学部（文科）では、「学校の勉強」を超えた「才能」が重要、という考え方なのです。そこで、次の引用を見てください。

戦後、文学部に女子学生が進出していきます。東大にも女子学生が入ってきます。私立大学の文学部にはどんどんどんどん女子学生が入ってくるわけです。新制大学発足まもない1950年1月号の『文藝』に辰野隆、中野好夫、高橋義孝の「文科の学生を語る」が掲載されています。

編集部「女の学生は丸暗記するといいますが」

中野好夫（当時、東大英文科教授）「それはあります。こっちが忘れたような冗談まで答案に書いてありますよ。実によくない。だから試験の答案で落第点をつけるのは絶対に

¹⁷ 同上

¹⁸ 林健太郎（1913～2004）（1929年一高入学）「自由の孤城に住みて」『移りゆくものの影：一インテリの歩み』（文藝春秋新社1960年）

ない。落第の能力を持っていないのですね。気の毒に」¹⁹

——女ってやつは……ということです。(笑い) そして、当時、東大仏文科の教師を定年退職していた辰野隆が、「先生の言うことはよく聞くし、あれでは落第しっこなしです」²⁰と言います。つまり、女子は成績がいいから東大なり何なりに入ってくる。でもそれは単に学校の勉強をしているだけ——というわけです。今こんなことを言ったら、本当に怒られます。でも私がまだ学生だったころ、「女ってのは結局、語学はできるよね。よく勉強するもん。でも、本当の文学の才能とは無縁なんだ」という考え方というのは実際、けっこう堂々と口にされていたのです。

それで、暉峻康隆氏の有名な「女子学生世にはばかり」と、それを受けた池田彌三郎の「大学女禍論」を最後の引用にします。これは、今やったら大変です。どの大学も一人でも多く女子学生に入ってもらいたいのですから。本当に、いざとなったら（合格の）点数を下げてでも入ってもらいたい、というのが大学の本音です。

暉峻さんは言います。

「昔の文学部は、文学部以外はどうしてもいやだという連中（男子）の集まりであった」。なのに女たちが「学科の成績がよいというだけで、どしどし入学して過半数をしめ」²¹……暉峻さんは続けて「女子は文学部へ来ても、花嫁修業の代わりにしてもらっては困る」なんて言っています。文学部はまさに「学校の勉強なんかしない」という男の領域だったのに、なんたることか、ということ。

それでは、女子にとって「破るべきもの」とは何か、その方法とは何か。「学校の勉強なんかしない」ではないわけです。「破るべきもの」というのは世間的な道徳だと私は思います。先ほど上野千鶴子さんの言葉を引用しましたが、上野さんも若い大学生として、「私は世間的な道徳なんかに縛られないんだ」というのをやっていたと思います。同じように高等女学校の優秀な女学生たちも、「学校の勉強なんてしない」というメンタリティーはないにしても、「道徳を破っていくのだ」という心意気があった、と私は考えるわけです。たとえば平塚らいてうなんか、そうですよ。平石さんが取りあげていらした『虞美人草』の藤尾もそうだと思います。自分たちを縛っている何らかの道徳を破ってやる、ということです。それが意外と外国語を学ぶということと結びついていました。1927年に岩波文庫が発刊され、どんどん外国文学の翻訳が出ますが、その前は、外国語を知らなかったら読めなかったのです。

たとえば『ウェルテル』を読みたいなら、キャッセル文庫の英訳か、レクラム文庫のドイツ語で読むしかない。この世代の人間にとって外国語というのは、読むために必要不可欠なものなのです。ですから、『虞美人草』の藤尾が小野さんに、平塚らいてうが森田草平に教わりながら外国文学を読むというのは、やっぱり不道徳なことなのです。文学は不道徳なので。そしてなお道徳を破るために、平塚らいてうは森田草平を引き連れて、雪の塩原に逃げていきます。才能ある女にとって、「自分の殻を破る」行為とは、「学校の勉強なんかしない」なんてことではなくて、「道徳なんかに、私は縛られない」ということです。現代では〇〇〇〇〇さんでしょうかね。この部

19 辰野隆(1888～1964)(1905年一高入学)・中野好夫・高橋義孝「文科の学生を語る」『文藝』1950年1月号

20 同上

21 暉峻康隆「女子学生世にはばかり——彼女らの目的は何か」『婦人公論』1962年3月号

分は伏せ字にしてください。(笑い) 終わりにします。(拍手)

蔵田：伏せ字にするかどうかは編集段階で検討させていただきます。(笑い)

女子にとって破るべき殻は何か。戦後の「女子大生亡国論」にもつながりますが、ここでは女性が文学を鑑賞する、芸術を鑑賞するというのはどういうことなのだろうかといった問題が出てくると思います。

続いて小平麻衣子先生から、「〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか？——教養の拡張と文学の関係」というタイトルでお話を伺います。

〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか？ ―― 教養の拡張と文学の関係

小平麻衣子
(慶應義塾大学 文学部 教授)

みなさん、こんにちは。私は、慶應義塾大学から参りました。余談からですが、今、慶応の文学部の入試には国語の試験がなく、小論文だけです。それは、高田先生がお話しされた池田彌三郎の提唱によるというのですが、国語の試験だと成績は女子の方が良いという当時の先生方の認識と、関係があるのですか、どうですか…。小論文だけの現在も、合格者には女子が多いわけですから。

さて、今回は「〈〇〇鑑賞〉は趣味なのか」というタイトルにして、鑑賞ということを入り口にしながら、教養とジェンダーの関係を考えてみたいと思っております。

みなさんは、鑑賞ということにどのようなイメージをお持ちでしょうか。従来は、文学に関しては、教科書でも文学講座の本などでも、まず語釈のようなものがあって、その後に必ず鑑賞の手引きといったようなものがありました。そこで作家の人生観や、美しい表現を味わうというのが、私などが受けてきた教育の中では一般的なパターンになっていて、広く行われていました。ですので、鑑賞というのは文学に対する態度としてあり、本にもそういうふうに書いてあるわけですから、学生の卒業論文といった勉強の集大成でも、やり方はこうした個人的な読解のようなものが一般的でした。

卒論が専門課程の仕上げだとすると、鑑賞というのは研究でなくてはならないわけですが、一方で、「映画鑑賞」とか「音楽鑑賞」が、一昔前までは必ず履歴書の「趣味」欄に書かれたように、鑑賞には、趣味のようなものというイメージもあると思います。文学研究のイメージが、こうした「鑑賞」を中心にイメージされればこそ、世間の方の中には、文学を学校で学ぶ必要があるのだろうか、一人で勝手に味わっていればいいのではないかと、思う人もあるのかと思います。今回は、そういう考え方がいつごろから出てきたのかを、歴史的に考えてみたいと思います。

高田先生のお話は「教養主義」ということでしたけれども、今日では、「教養」とは「社会に出たときに必要な常識」、つまり時事的な知識なども含んで考えられていると思いますし、逆に、「芸術に造詣が深い」とか「人生を豊かにするもの」として考えている人もいるかもしれません。最近では、たとえば「24時間仕事バカ！は人生を謳歌する」というキャッチコピーの雑誌に『GOETHE』というタイトルがついているのなどが象徴的ですが（幻冬舎ホームページより）、40代以上の男性向けでしょうか、経済的な余裕層向けの雑誌に、文学とか芸術関係の記事が比較的多く並んでいるのを見ると、それらが「余裕のある男の証」としての教養ととらえられることもあると思います。教養とは、こうしたあいまいなものですが、これと鑑賞との関係がどうなっているのかを考えてみます。

ではまず、「〈鑑賞〉が重視されてきた経緯」をたどってみたいと思います。

「鑑賞」という言葉は非常に古い漢語のような気がしますけれども、鑑賞行為、すなわち人生観を味わったり、美的だということを味わったりするというのが一般化したのは、わりと最近のことです。ここでは、戦後の1950年代～60年代の、主に日本の近代文学の研究者の文章を①～④に載せました。それぞれの方については簡単に説明を載せていますが、③や④など女子大で大きな役割を務めた方もおられます。後の話とつながりますので、覚えておいてください。



小平麻衣子さん

これらの方々は、私が研究をするときにも必ず参照する大変有名な近代文学の大先輩です。それぞれの本は含蓄に富んだ素晴らしい内容なのですが、そこから私が揚げ足取的に引いてきた部分を紹介します。

まず、①の長谷川泉さんが鑑賞についてどういうことを言っているか、傍線部だけ読みます（傍線は私がつけたものです）。(近代文学を読む際には)「研究という普遍な態度よりも、より個人的で特殊な態度」が要請される、というのが鑑賞です。そして、「鑑賞は研究を従えることがある」と、鑑賞は研究よりも高度なものである、ということを言っています¹。

②の本多顕彰という英文学者は、「気むずかしいフローベールの文学は、我々素人には、とうてい判らず、鑑賞できないのでしょうか。そういうものではありませんまい」と、素人の鑑賞も可能である、と言いながら、「といつても、ほんとうは、文学の鑑賞は誰にでもできるものではありません」などとも言っております²。

そして、③の吉田精一は、「一般人も具体的直接的には一切の概念を感性的につかんでいる」のであり、芸術家やプロの研究者だけではなく、素人も深いところを一瞬にしてつかめる、と言っています³。それがすなわち鑑賞にほかならないということです。

④の三好行雄は、鑑賞はだれにでもできることだけれども、「より高度な」、「高次の鑑賞」というものは当然、学問として想定されると言い、しかし「くどいようだが」として、「鑑賞が成立するとしたら、解釈の進行過程で原鑑賞の基本的な受容型の変更は生じない」と言っています⁴。すな

1 長谷川泉 (1918～2004年。近代文学研究者。学習院・国学院・東大などで教えた)

「研究は自然科学にも文化科学にも普遍な概念であって、芸術作品を対象として主体と客体とが相結ぶ場合には、研究という普遍な態度よりも、より個人的で特殊な態度が要請され、それにこたえる方法論が必要になる。鑑賞は研究を従えることがある」(『第三版序』『近代名作鑑賞(第三版)』1958年、至文堂)

2 本多顕彰 (1898～1979年。英文学者。法政大学教授)

「文学の鑑賞という、むずかしいことのような感じを与えます。(中略)それを聞くと、文学というものは、そんなにむずかしいものかしら、と恐れをなす人があるかもしれません。(中略)しかし、ほんとうにそうなのでしょうか。気むずかしいフローベールの文学は、我々素人には、とうてい判らず、鑑賞できないのでしょうか。そういうものではありませんまい。(中略)といつても、ほんとうは、文学の鑑賞は誰にでもできるものではありません」(『一般教育叢書シリーズ 文学』1952年、同文館)

3 吉田精一 (1908～1984年。近代文学研究者。東大・大妻女子大などで教えた)

「しかし、これはひとり芸術家に限るのではない。一般人も具体的直接的には一切の概念を感性的につかんでいるのであり、彼が創造力をもたなくとも、芸術家と同一原理の心の働き方によって芸術作品を理解し、共感することができるのである。これがすなわち鑑賞にほかならない」(『言語過程説と文学——時枝学説批判』『国文学 言語と文芸』1959年3月、明治書院)

4 三好行雄 (1926～1990年。近代文学研究者。東大・昭和女子大などで教えた)

「唯一の正しい鑑賞が想定できるか、どうかという問いがつぎに来る。(中略)いや厳密には、ただしいという言葉は避けるべきであって、より高度な、あるいは、より高次の鑑賞と呼ぶべきであるが、それにしても鑑賞の究極の目標ないし理念の想定は不可能ではない。(中略)くどいようだが、鑑賞が成立するとしたら、解釈の進行過程で原鑑賞の基本的な受容型の変更は生じないと見るべきなのである。かりに解釈によって原鑑賞がうらぎられるという事態が生じたとしたら、鑑賞は挫折し、批評ははじまる」(『鑑賞と批評 序にかえて』『作品論の試み』1967年、至文堂)

わち、一番最初の素人の鑑賞と、それが高度な研究になる間に精査の段階を積み重ねていくのだけれども、積み重ねていったとしても一番最初の鑑賞は変わらないはず、ということです。

この方々は鑑賞の特色として、「鑑賞というのはだれにでもできる」と言っているが、「高度なレベルはある」とも言っています。そこで疑問に思うのは、それが一体どのように実現されるのかということです。そして、どうしてこのような言い方をするのかを考えてみると、そこにはこの時期特有の大学の事情があるように思います。

大学はこの時期、非常に学生を増やしています。1960年ごろまでは大学・短期大学への進学率は10%前後でしたが、70年に24%、75年には38%となって、「大衆化」したと言われる段階が訪れます。そして、〈鑑賞はだれでもできる〉と〈にもかかわらず非常に高度〉という言い方は、こうした大学のあり方と関係があったのではないかと思います。

大学に入れる人が増えたというのは、いいことには違いないわけですが、大学への入学が増えるということは、学んだことを職業としない人が増えるということです。進学率が10%未満ということは、大学を出た人はそのまま官僚になるか、専門性を生かして大学の教授になる——もちろん、それ以外の職業もいろいろとあると思いますけれども——という人数なわけです。ところが、30%を超えて40%ということになると、高度経済成長期でもありますから、大学を出て一般の企業に就職する人が増えていくということになります。

それで、先ほどの鑑賞の語られ方ですが、私は、「だれにでもできる」かつ「高度なレベルはある」というのは、文学研究というのが本来的にそういうものだというわけではなくて、この時期に特有の、必要とされた言われ方だったのだと思っています。学生の多数化で、ほとんどの人はサラリーマンになるので、学問する内容が常識以上に使えることはない、またその程度でよい、という状況です。「だれにでもできる」と言うことは、間口を広げて、その学問の領域にだれでも入りやすくします。そしてまた、サラリーマンなら使わない国文学・近代文学の知識は、適当にやり過ごして専門性には達しない知識レベルのまま大学を卒業する人が仮にいたとしても、学生たちが最高学府である「大学で学んだ」という満足を得ることは必要なので、そこで「高度なレベルはある」ということになるのではないのでしょうか。「君たちはそのままです晴らしい」のです。もちろん、一部は本当に研究者も養成しなくてはなりませんし、最高レベルの知識で主体的な思考をしていくとはいけません。「高度なレベルはある」、なくてはならないのです。

このように、〈だれにでもできて、そのまま高度〉というのは、この両方をかなえる、この時期特有のレトリックだということになります。私自身は、こういうありかたが文学研究の本質とか真理であるとは思っていません。レトリックというのは、言葉の上でいうことはできるけれど、実際に行うことは困難であるという意味です。このように語られた文学研究は、何をするものなのか分かったような分からないような、文学的センスみたいなもので語られがちな、あいまいなものになってしまうということは、想像していただけたらと思うのです。実はこれは、教養というものの自体がこの時期に変質を起しているということと大きくかかわっていると思われます。

戦後の新制大学で「教養」という言葉が使われる局面は、カリキュラムにおける「一般教養」です。これは、アメリカの「ジェネラル・エデュケーション」に学び、人文・社会・自然科学を均等に学ぶというものでした。つまり、卒業して会社の人間になるわけですから、専門的すぎることよりは、ジェネラル（一般的）なものを満遍なく、常識程度に学んだほうがよいのだという

考え方です。一方で、それまであった大正教養派的な、非常にエリート意識の強い旧制高校的な教養というものが続いています。これは、いかに生きるか、いかに人格を伸ばしていくかを考えるということで、人文科学寄りです。そして、これは高踏的な雰囲気を持ちます。すなわち、当然のように古今東西の書物が読める、あるいは買えるという数少ない人たちによる大学内での教養ということになります。戦後には、これらが同時期に大学の目的として混在していることになるわけです。

カリキュラムとしての「一般教養」の「教養」というのは、大正教養派の教養とは内容が違ったわけですが、翻訳語として「教養」という言葉を採用してしまったところからも、こういう混同が起ってくるわけです。私たちが「教養って、何？」と思ったときに、それが書物の知識のことなのか、芸術や芸術に親しむことなのか、人生のゆとりのことなのか、あるいは社会に出たときに必要な、池上彰さんのような常識のことを言うのか、そういうことが今、まぜこぜになっているゆえんです。

では次に、研究者自身がこの時期、文学をいかに語っていたかということを見ましょう。そこで、文学は社会の役に立つか——文学部へ行くとすると、「就職はあるのか」と親に責められたりする方もあると思うのですが——ということに関して、その時期の研究者たちは自ら進んで次のように言っています。

塩田良平は、「要するに、文学は何のためにつくるか、といふことは、自分や特定の読者の生活利益を目的とするものではない」と言っています。利益はない、ということです⁵。また、高橋健二や吉田精一も、「目前の得をしない」「無用の用」と言っており⁶、本多顕彰は「文学は文学以外の目的を持たず、文学以外の目的に奉仕しない」と言っています⁷。さて、どうして「役に立たない」ということをこの時期の人たちが言ったのでしょうか。それは、戦時中に「国のため」に役に立ってしまったことへの反省から、あえて「役に立たない」ことを誇りとしてこのように掲げたわけです。この場合の「社会」というのは国家とか経済のことです。ですから、別の観点から社会というものを定義し直せば当然、文学だって社会の役に立つということになると思いますけれども、ここでは、その時代ならではの「社会の役に立たない」ということです。

さて、鑑賞について語られていることと、文学は社会の役に立つのかということを通して見えてくるのは、この時期に文学をめぐる学問が、一方では大正教養主義から旧制高校を通じて流れ込んでいる優雅さや余裕と、そうであるからこそその非社会的なイメージを併せ持つものになってきているということ、またそれとは実は両立しない非専門性も重ねられていることです。この矛盾したそれぞれを内包するイメージというのは当然、二枚舌的に使われていくということが考えられます。

そして、ここで女性が登場します。高度経済成長期に、企業に就職するのは男性で、女性は家庭の主婦になることが社会から要請された時代にあっては、文学という学問が、今見てきたようなイメージのゆえに、〈女性向き〉という形で周囲を説得していきました。一方では優雅さというプラスのイメージもまとっていますので、女性自らが喜んで自主的にそこに入っていくということを可能にしました。またその優雅さや非専門性ゆえに、経済の主体である男性たちからは、馬鹿にされてしまうような学問になりました。

5 『文学入門』1959年、青林書院

6 『文学入門』1961年、小峰書店

7 『人生のための文学』1974年、角川書店

もちろん、これはイメージにすぎません。当然、文学というものも経済活動でもありますので、実際のところ、作家や出版界で働く人というのは男性が多くて、女性はなかなか入り込めませんでした。ですから、〈女性向き〉というのはもちろんイメージにすぎなくて、正確に言いますと、〈文学が仕事にならない限りにおいて女性向き〉として許容されていたということです。こうなると、文学部にいて肩身が狭いのは、むしろ男性のほうという気がしてきます。文学部の男子というのは実際、このぐらいの時代から後になると、何か鬱屈したものを抱え込むことになるわけです。そして、こういったイメージが繰り返し語られることによって、戦後の大学の文学部は、本当に女子学生が多くなっていきます。

資料の「戦後女子大学と文学」というところに、共学大学の文学部の女子学生比率というのを書いてありますが、女子大の文学系の学部が増加もあります。先ほどの近代文学の先生方が女子大に広がっていったということも考えると、どういうことが起こっているのか、その見取り図も見えてくると思います。大学がどんどん人を入れる、間口を広げる。そうすればするほど、入ってきた人たちは専門性が職業につながるような高度な中身を身に付ける必要はなくなるわけで、言葉は悪いのですが、いわば「お客さん扱い」ということになっていきますが、そこに女子たちがぴったりはまってしまったということです。

これはレトリックだとさきほど申し上げました。そのままで高度、しかしだれにでもできるわけではない、という、例のあれです。そしてそのレトリックでは、どうなると高度なのか、プロの資格ができるのか、明確にされません。学すべき技術の段階があれば、「君はここまでしか来ていないからだめ」と明示できるわけです。ところがそこはあいまいになっています。ですから、「そのままで高度」と言っていながら実は「だれにでもできるわけではない」というので、「何か君はちょっと違う」「大学院はまだ無理かな」「教員としてちょっとだめかな」と、理由を示さずに排除することの、一つの言い訳のようなものとして機能するレトリックでもあるということです。

そのような形で、どうするとプロになれるのかということと言わないまま、特定の人——ここでは女性ですが、その排除に加担していくということにもなるかと思います。こういう構造が、高田先生がお話しになった実際の女子学生たちの意識といかに違うことか。実際、大学で学んだ女子学生たちは、試験でよい成績を取って入学する学生たちであったわけですから。

こうしたレトリックが、説得力があるように見え、一般化したせいでしょう。文学は〈女性向き〉と言われながら、女性はそれを職業にはできず、芸術好きな、しかし消費をするだけの〈鑑賞女性〉が芸術の領域では非常に増えていきます。絵画の展覧会も、目的なくカルチャーセンターで何かを深めるのも、女性が多いですね。私は、芸術をゆったりと何の目的もなく楽しむことをよくないと言っているわけではありません。それはそれでいいことだと思うのです。ただ、やり方の選択肢が示されていない、やり方の選択が閉ざされている、ことを問題にしているのです。

その後の国語教育や国文学研究は、鑑賞というとらえ方を発展させる形で、作家や作品を論じ、発達してきています。相対化するために振り返ってみると、「鑑賞」は研究ではない、ということをはっきり言う人も、戦前にはいました。そういう人たちは戦後、消えてしまいました。思想的な理由はあるのですが、長くなるので省略して、とりあえず彼らがいなくなって、鑑賞への一極集中になりました。

たとえば〈国文学研究〉のやり方に、文献学とか歴史社会学というものがありましたけれども、

戦後は、そういうものは教育の場には現れず、鑑賞の影に隠れていきます。必ずしもこちらの方がいいわけでもありませんが、しかし例えば、文献学というのは、語学の専門的知識や、高価な本を集めたりする知識や財力は必要ですし、歴史社会学というのは、政治的な立場であったりするので、深刻な意見の対立というのが付き物です。こうしたものが影を薄くして鑑賞の独裁になると、やり方として何が残るのでしょうか。私たちにおなじみの〈ザ・文学〉です。小説などを読んで、作中人物や作家の人生観・死生観・恋愛観・美的感覚といったものに共感する・思いやる・疑似体験する楽しみ方になります。もちろんこうしたものを牽引したのは、知識も語学も不要ようにみえる日本近代文学です（本当は必要ですよ）。

そこには専門的な内容も必要ないし、深刻なけんかを引き起こす意見の対立也没有。仮にあなたと私の恋愛観が違ったとしても、「へえ、そうなんだ」で済む程度のことですね。だから、ひとりひとり違っていい、とはいっても、その違いはわりと狭い範囲で、実は共感しあうというタイプの学習、あるいはその延長としての研究が幅を利かせてくることになります——もちろん全部が全部というわけではありませんが。そして、共感する・思いやるというのは、伝統的・社会的には女性に期待されてきた役割なので、文学はますます〈女性的〉と見なされてしまうわけです。さきほどのサイクルは、どんどん悪循環に陥っていきます。

しかしながら1960年代以降、こうして間口を広げて、女性たちはどんどん大学に入ってきたわけです。入ってきたということは、支配的な体制の側が、いかに述べてきたようなコントロールする言葉を吐いていても、そこから違った動きが出てくるということもあります。大学に入っている女子学生たちは、勝手に勉強してしまいます。知識も高めていくでしょうし、鑑賞一辺倒の考え方に対しても、いろいろな批判を投げかけていくことになるでしょう。もちろん、教える教授たちのほうも、全員が手加減した内容を女子に与えていたわけではないでしょう。本日、こうして3人の女性研究者が並んで、今までの研究のやり方になにやかや女性の立場からの批判をしているのも、それぞれ違う出自ではあると思いますけれども、そのような経緯をたどって出ているものだと思います。

繰り返しますけれども、鑑賞とか消費で文学を楽しむことが悪いと言っているわけではありません。そういう楽しみ方も当然ありだとは思いますが。ただし今までの経緯を見ていると、文学が、非常にあいまいなセンスみたいなもので語られたことで、文学部には女子の学生がたくさんいるのに、職業にはしないし、大学院に行っても大学教員の職が得られないという状況を招いてしまったのかなと思います。今日は、その構造についての私の解釈をお話ししました。

私の発表はこれで終わりにいたします。どうもありがとうございました。（拍手）

蔵田：「そのままで高度、しかしだれにでもできるわけではない」、ときれいにまとめていただき、なるほどと思いました。文学部に女子学生は多いのに、大学院になると減り、教員になるとさらに減るという構造は、ひょっとして小平先生が指摘されたことに原因があるのではないかという気がします。

最後に、本学の映像・表現文化論講座の水溜真由美先生からコメントをいただきます。

《コメント》

水溜真由美

(北海道大学大学院 文学研究科 准教授)

今日のシンポジウム全体のテーマと、3人の先生方のご報告についてコメントさせていただきます。

まず、今日のシンポジウムのタイトルは「教養とジェンダー」ですが、近代日本における教養の意味を考える場合には、「教養主義」を避けて通ることはできません。冒頭の蔵田先生による趣旨説明にもありましたが、今回のシンポジウムの目的の1つは、教養主義をジェンダーの視点から捉え直すことにあるように思います。

そもそも「教養主義」とは何かといいますと、一般には、「旧制高校を主な舞台として、出版文化の発展に伴って成立したエリートたちの学生文化」といった意味で理解されていると思います。時期的には、明治末期から大正初期にかけて成立し、戦後の大衆社会の到来と共に崩壊したとされます。教養主義についてはさまざまな議論や研究がありますが、よく参照される文献として、竹内洋『教養主義の没落 ― 変わりゆくエリート学生文化』（中央公論社、2003年）、筒井清忠『日本型「教養の運命」 ― 歴史社会学的考察』（岩波書店、1995年）などを挙げることができます。

それでは、かつてのエリート学生たちは、何のために読書に勤しみ教養を身につけようとしたのでしょうか。その理由は、表向きは、人格を高めるためだったということになっています。ですが、先ほどご紹介した竹内洋『教養主義の没落』などでは、教養がそうした表向きの意味とは別に、文化資本としての意味を持っていたことが強調されています。つまり、エリートの男子学生にとって、教養は、ピアグループの中で人間関係を築いていくための重要な手段でした。その際、どれだけ多くの本を読んでいるか、どれだけ豊かな教養を蓄えているかということによって、仲間同士の間に一種のヘゲモニー争いが生じていました。

さて、以上のような性格を持っていた教養主義がはらんでいた大きな問題として、ジェンダーの偏りがあります。そもそも、旧制高校を主な舞台としていたという点からして、教養主義が女性を排除、あるいは周縁化する形で成立していたことは明らかです。教養や教養主義の問題を考えていく場合に、このことはとても重要なポイントだと思います。しかしながら、従来の教養主義に関する研究は、必ずしもジェンダーの問題に自覚的でなかったように思います。他方で、今日ご報告くださった3人の先生方は、それぞれのご著作の中で、近代日本における教養のあり方や教養主義について、ジェンダーの視点をふまえて問い直しをされていらっしゃると思います。以下では、3人の先生方のご研究、そして今日のご発表もふまえて、教養あるいは教養主義とジェンダーの関係について考えてみたいと思います。

まず、「ジェンダーの視点から教養主義を問い直す」とは具体的にはどのようなことを意味するのでしょうか。一つの方向として、教養主義が持っていた男性中心主義、マッジョさを批判して

いくということがあります。女性が教養主義の基盤となったエリート集団から排除されていたこと、そして、教養主義はそうしたホモソーシャルな関係性の中から生まれた文化であることを批判的に問題化していくことは、大変意味のあることだと思います。

ただし、一つ注意しておくべき点があります。たしかに、戦前の女性は、旧制高校や旧帝大などの高等教育機関からはほぼ排除されていましたが、教養にアクセスすることがトータルに否定されていたかといいますと、そうではないということです。つまり、女性も教養にアクセスすることは許されていたものの、男性と同じような仕方で教養にアクセスすることができたわけではない、ということです。たとえば小平先生は、ご著書の『夢みる教養』の中で、教養をめぐる男性と女性の二重基準について詳しく論じられています。戦前の高等女学校と男子の通う中等学校のカリキュラムは大きく異なっていました。それと同じように、「男性向け」と「女性向け」の教養には区別がありました。また、先ほどの平石先生のご報告の中で、明治時代において外国語を男性が教えて女性が教わるという構図があったというお話がありました。また、小平先生のご報告にありましたように、戦後、大学の文学部には多くの女子学生が入学したにもかかわらず、教員や研究者の多くは男性でした。つまり、教養の教授や伝達をめぐる、男女の間に非対称的な関係が存在したということです。あるいは、平石先生のご研究では、明治時代に、教養ある女性をファム・ファタール的なイメージで表象したり、女徳を欠いているとして否定的に表象したりする状況があったことが指摘されています。つまり、女性がどのように教養を受容すべきか、教養とどのような関係を取り結ぶべきかといったことを、社会の中で実質的にヘゲモニーを握る男性が定義する状況が存在しており、その中で男性にとっての教養のあり方と女性にとっての教養のあり方が大きく差別化されてきたということです。

ただ、もう一つ見落としとしてはならない点があります。男性が、女性と教養の関係を男性に都合の良い仕方で定義しようとしてきたとして、果たして女性は、男性の定義通りに、教養を受け入れてきたのかということです。近代日本において、女性にとって教養とは何であったのかを、社会や男性の視点のみでなく、女性自身の視点からも考えていく必要があると思うのです。実際、3人の先生方のご著書の中でも、男性の思惑に還元されない女性にとっての教養の意味が、さまざまな形で論じられています。今日のご報告は、どちらかというところ、社会や男性が女性と教養の関わりをどのように意味づけていたのかという点に力点が置かれていたように思いますが、女性にとっての教養の意味という点について何か補足していただける点があれば、後ほどお願いしたいと思います。

ついでに、この点について、私の考えを少し述べさせていただきます。近代日本において、教養が、誰よりもエリートの男性のものであったということは間違いなことだと思いますが、歴史を振り返ってみますと、教養がエリートの学生の枠を超え、ジェンダーの枠を超え、階層の枠を超えて広がっていったという事実も見逃せないと思います。

一例として、松田解子というプロレタリア作家についてお話ししたいと思います。松田は秋田



水溜真由美さん

県の荒川鉦山という銅山で生まれ育った、貧困層の女性です。高等小学校を卒業した後、非常に努力をして、1年間だけ秋田の女子師範学校で学ぶ機会を得ましたが、家が裕福で当然のように女学校に通うことができたという階層の出身ではありません。ところが、解子の『女人回想』（新日本出版社、2000年）という自伝を読むと、いわゆる教養主義的な作家や作品の名前がいろいろな形で出てきます。いくつかエピソードを紹介したいと思います。

まず、解子が高等小学校に通っていた頃の話です。解子はとても向学心が旺盛でした。そして、たまたま周囲に教育熱心な先生がいて、日曜学校を開いて勉強好きな子供たちに勉強を教えていたのですが、その学校に解子も熱心に通いました。その頃のことで、解子はいつも学校の帰りにフサという友達の家で宿題をしていたのですが、坑外夫だった彼女のお兄さんは、たくさん本を持っていました。解子はその中に、ゾラ、モーパッサン、ゲーテ、トルストイ、ダンテ、フローベール、ゴッティキーなど、外国の作家が書いた本がたくさんあるのを知って興奮します。そして、解子は、フサの家からたくさん本を借りて、自分の兄と一緒に熱心に読んだようです。

二つ目ですが、先ほどお話ししたとおり、解子は秋田の女子師範学校に入学しますが、それよりも前に、どうしても自分のいる環境から抜け出たくて、赤十字の看護学校に入ろうとしたことがあります。ところが、試験には合格したものの、鉦山事務所のタイピストにされてしまいます。坑夫の娘としては、これは一種の抜擢だったと思うのですが、とにかく鉦山事務所でタイプを打つ仕事をすることになります。その時、同じ事務所で働く主任の男性の本箱にたくさん本が並んでいることに気づきます。解子は、その主任の本を、こっそりと読んでしまうのですが、どのような本かという、これまたゲーテやハイネといった教養主義の必読書なのです。

もちろん、解子はかなり例外的な女性ではあったと思いますが、当時の下層階級の中にも、知的好奇心が旺盛で外国の文学書を読むような女性が一定程度いたことはたしかだろうと思います。つまり、大正期あたりから、教養は、ジェンダーも階層の枠も超えて、国民的な規模で広がりつつあったということが推測できます。

ところで、敗戦後、文化に飢えた人々が文化に対して強い情熱を向けたということがよく指摘されます。総合雑誌の『世界』は10万部も売れたといいます。その延長線上で、一般の市民が各地でサークルを組織して、様々なジャンルの文化活動を行うようになります。戦後の早い時期になぜこういったことが可能になったかといいますと、戦前に大衆レベルでの教養の蓄積があり、知的関心が広がっていたためだと思います。このような現象を理解するためにも、教養が、エリート学生だけではなく、女性や下層階級にとってどのような意味を持っていたのかという点について考える必要があると思います。

最後に、今日における教養の意味を考えたいと思います。

3人の先生方のお話にありましたように、かつての教養主義は男性中心的で、エリート主義的で、非常にいやらしいものであったわけです。そして、それをそのまま今の時代に復活させるべきかという、多くの問題があります。しかし、教養や教養主義が全く意味のないものかと言えば、私はそうは思いません。それでは、今日における教養の意味はどのような点にあるのでしょうか。

小平先生は『夢みる教養』の中で、今日教養という言葉の意味は非常に拡散していて、お茶、お花、ワイン、ダンス、カラーコーディネートなど、様々なものが含まれるようになったと指摘されています。つまり、現在教養の意味を考えようとするれば、教養とは何か、というところから

議論する必要があるということでしょう。けれども、とりあえずここでは、教養を、ほぼ古典的な意味で、読書等を通じて得られる人文・社会系の「幅広い知識」とであると捉えておきたいと思います。

先ほどお話ししましたように、従来の教養主義についての研究は、一面において、教養の持っていた裏の意味、たとえば文化資本としての意味に目が向きすぎてしまい、教養が実質的にどのような意味を持っていたかという議論が蔑ろにされる傾向があったように思います。もちろん、だからといって、教養は人格形成に役立つというような古典的な主張に逆戻りしたいわけではありません。

教養の今日的な意味を考える場合に、エドワード・サイードの『知識人とは何か』（大橋洋一訳、平凡社ライブラリー、1998年）が一つの手がかりになるのではないかと思います。この本の中で、サイードは、知識人はアウトサイダーであり、アマチュアでなければいけない、として、知識人が国家や共同体に安住することの問題を指摘しています。サイードは、知識人は周辺の場所にとどまり、専門分野において自明視されている約束事や国家の中で人々が自明だと考えていることを常に批判的に見ていく必要がある、と主張します。もちろん、サイードが念頭においているのは、狭義の知識人ですが、ここで知識人について言われていることは、知識や教養にアクセスする全ての人に当てはまるように思います。つまり、教養を得ること、知識を幅広く学ぶことの根本的な意味とは、共同体や専門分野の中で自明視されている事柄を相対化したり、批判的に見たりすることであるのではないかと思います。

これで私のコメントを終わりにさせていただきます。

蔵田：どうもありがとうございました。

ではここで、休憩を取らせていただきます。皆さんのお手元に質問用紙があると思います。休憩時間にご記入いただき、会場受付もしくは近くのスタッフにお渡しください。後半は、それを基にして、パネルの皆さんと水溜さんを交えてディスカッションを行いたいと思います。

ディスカッション

蔵田：それでは、質疑応答に入らせていただきます。皆様からたくさんのご質問を頂いています。どの先生への質問かを書いている方もいれば「どなたでも」というものもあります。「どなたでも」というご質問については、こちらのほうで適当に回答する方を割り振らせていただいた上でお答えいただきます。

まず、小平先生へのご質問です。

「文学教育における『鑑賞』一党独裁というお話がありましたが、このような傾向は今後も続くのでしょうか？教育方針の見直しなどは行われていないのでしょうか？」

小平先生、いかがでしょうか。

小平：鑑賞一辺倒の文学教育のやり方というのはもちろん、少しずつ変わってきていると思います。そういうやり方に対して批判のある世代が出てきて久しいです。今の研究というのは、ポストコロニアル批評やらジェンダー批評と言われるようなものや、そしてその後もさまざまなものが出てきているので、国語教育も連動していると思います。しかしそれよりも、もしかすると国語教育の中では、もはや今は文学教材というのはどんどん縮小されて、読む、書くというよりはコミュニケーションの能力を高めるといったほうに比重がかかっているかもしれません。ですから、文学教育が今後うれしいような形で変わっていくのを私たちが見られるのかどうか、そこは少し難しいかもしれないと、ちょっと悲観的な感じもいたします。

ただ、先ほど話をはしょってしまったのですが、鑑賞ということを言いだしたのは、日本の近代文学研究の、ほかの領域からの独立という意味合いもあったと思うのです。歴史に從属する〈文学史〉とか、社会の階層を分析する歴史社会学の〈援用〉としての文学研究、そういったものとは違って、独立して美とか心情というものを考えていく——すなわち、日本近代文学というものが学問として独立する一つの要素を強く打ち出したということでもあったので、悪いことばかりでもなかったと思います。ただ、さきほど申し上げたように、世間での文学の価値自体が変わってきていると、文学部とか、その中での日本文学科みたいなものが、これまでのような組織としては独立を保ちにくくなり、逆に学問の形式を変えていくということも起こっていると思います。

蔵田：高田先生にもご質問を頂いています。

「現在でも『学校の勉強なんかしない』ことがカッコイイという風潮は残っていると思いますか？」

一つ目のご質問ですが、いかがでしょうか。

高田：ある一定の高校ではそうした風潮が残っているのではないかと、私は疑っています。麻布



討論の様子

とかね……あ、また言ってしまいましたけれども。(笑い) そういう高校ではいかにも、「受験勉強はしない」みたいな……。受験勉強を全然しないというわけにはいかないのですけれども、エリート高校だと言われている学校では、今でも「受験勉強なんかしない」という態度は残っているのではないかと思います。ただ、現在はもう、とにかく医学部に行って医者になれば安定した職業はないといった変な受験の世界になっていますから、少し変わってきているのでしょう。理系の人間はわりにヒネくれていなくて、「受験勉強なんかしない」といった態度を出さないかもしれないから、そのあたりは微妙なのですから、エリート校と言われているところでは、「受験勉強なんかしない」というような「ふり」といいましょうか、それはやっぱり残っているのではないのでしょうか。

受験（勉強で身に付く学力）は真の学力ではない、という考えが日本にはあります。私は以前、「地頭（じあたま）がいい」という言葉を知らなくて、「地頭（じとう）って何だろう。鎌倉時代か、ここは」と思っていたことがあります。(笑い)

地頭がいいというのは圧倒的にいいことだと多くの人が思っています。「あいつ東大へ行ってるけど、地頭はあまりよくない」という言い方もします。こういうのを例えばドイツ人とかに説明しようとしたら、大変難しい。日本にはもともと、学歴があるとか受験勉強の勝者であるとか、そうした「括弧付きの才能」の持ち主とは違う「真に頭がいい」人というのがいる、という考えがあるのでしょうか。興味深いです。ですから、「受験勉強なんかしない」といって頑張っているエリート高校の17才などは、「早く大人になれよ」という目で優しく見てあげつつ、クールな考察の対象にしたいと思っています。

蔵田：会場に麻布高校などのご出身の方がおられたら、その辺のところを、後でこっそり教えていただきたいと思います。(笑い)

高田先生にはもう一つ、ご質問があります。

「ご報告の後半に言及された、女性の教養と道徳の関係を裏付けるような例（人物や作品など）がありましたら教えていただきたいと思います」

高田：平石先生が扱った『虞美人草』の藤尾もやっぱり、道徳を破ろうとしています。つまり、父が決めた結婚の約束を破ろうとしているわけです。また、よく知られていることですが、

小野さんと待ち合わせて、今で言うところのラブホテルに行こうとしていて、性道徳を破ろうとしているわけです。

そして、実在の人物は何と言っても、すでに先ほど挙げましたが、平塚らいてうでしょう。彼女も外国文学を英語で読むわけです。水溜先生のお話で、向学心ある貧しい少女がゲーテとかハイネとかの「外国の人たちの本」に触れる感激体験が出てきましたが、ハイネなんて相当に不道徳ですよ。要するにこうした西洋文学を読むというのは、何か自分とは違う……今、いろいろなものに縛られている自分とは違う……そこで解放を求めた主人公はしばしば惨めに没落してしまうのだけれども、何かそうした没落に触れるというような体験だと思うのです。『ウェルテル』だってそうです。ゾラの『ナナ』だって売春婦ですからね。だから、女の人が文学を読むこと自体が、半分墮落なのです。しかし、“墮ちる”ことがまさに自分自身になるということなのではないか。これを私は「墮ちたお嬢さん」と呼んでいるのですけれども、女性にとって自分自身になるというのは、“墮ちる”ということですよ、いろいろな意味で。しかし、単なる墮ちた、貧しい女子だったらそれっきりなのだけれども、やっぱり“お嬢さん”でなくてはダメなのです。平塚らいてうの家もお父さんは高級官僚だし、藤尾の家は外交官です。高等女学校というのは初期の場合、やっぱりお嬢さんでないと行くことはできない。今は「本を読みましょね」と言いますが、明治40年ぐらいまでは、今、「ゲームばかりしてはダメ」と言うのと同じように「本ばかり読んじゃダメ」ということで、文学は一種、墮落の原因みたいに考えられていました。

墮ちたお嬢さんの系譜の物語……私は国文学者ではないから、はっきりしたことは言えませんが、「墮ちたお嬢さん」の話は少なくない。人物としては平塚らいてう、作品としては『虞美人草』とか、小栗風葉の『青春』ですが、高等女学校卒の女子をテーマにしている、みんな墮ちています。上野千鶴子さんだけが墮ちているわけではありません。(笑い)

蔵田：次に、「だれでも」ということで来ている質問です。

「女性が教養から排除されてきたという経緯はわかったのですが、昔の男性はなぜ女性を排除してきたのでしょうか。例えば、教養の側にいることで特権意識を内包した男性たちの中でホモソーシャルな関係性を構築することが彼らにとり心地よいものだったからなのでしょうか」

「普通に考えれば男性ばかりの世界に女性が入ってくることは、男性にとって望ましいことであるように思えるのですが、私の考える〈普通〉はむしろ特殊なのでしょうか。あるいはそれは新しい世代特有の感覚なのでしょうか」

これは旧制高校が男の世界であったということともかわっていくと思うのです。これは「だれでも」というご質問ではあるのですが、軍隊に関する著作もおありの高田先生にお答えいただきたいと思います。

高田：女同士とか男同士だけにいるほうが、プライベートで言えば私は楽しいですね。女4人ぐらいでワーワーと話しているところにぽつっと男の人が1人来たりすると、やっぱりちょっとは緊張して違う話になってしまいます。「文学」などの話とは離れて、本当のことを言うと、男同士で話したり女同士で話したりしているほうが楽しいというのは、多分そうではないかと、申しわけないけれども、個人的には思うわけです。ですから、旧制高校の世界で男同士で話したり、い

ろいろと人生の問題を語り合ったりするのは楽しかったらうなと想像するのです。そのことは女性の排除というよりは、女性はいつも外側にいて、青年期ですからもちろん恋もするわけです。決して女性とのつきあいを排除していたわけではない。女子ホモソーシャルでも男性ホモソーシャルでも、男同士で話して面白い、女同士で話して面白い、気も遣わないでいいし楽しいというのは、普通にあることではないかと思います。

ですから、老紳士たちが旧制高校のことをすごく楽しかったと振り返るときには、それをホモソーシャルと呼んでいいのかどうか分からないのですけれども、男同士でちょっと本音を話し合える、それが楽しかったということではないでしょうか。本音をなぜ出せるかということ、選ばれたエリートだけの世界だからです。それは、いろいろな旧制高校の思い出記を見て、そうだったんだろうなと想像できます。

蔵田：私は専門が哲学なので、「哲学は男の世界」といった言い方はすごく分かります。ただ、私は男ばかりでいるというのは好きではなく、女性が入ってきたほうが楽しいと思うのです。

それで、平石先生にもご質問を頂いています。

「近代の女性の教養は西洋のもののみならず、伝統的なものもその範囲に入っていると考えておりますが、当時の女性を排除するシステムの中でこの二つの関係はどのように考えるとよろしいでしょうか。もし平石先生からお考えがあれば教えていただけないでしょうか」

教養というと、「漢語が読める」といった要素もあると思うのですが、平石先生のお考えを伺いたいと思います。

平石：私は、専門が比較文学といっても西洋のものととの比較ということなので、あまり漢学のことはやっていません。ただし漢学というのは基本的には男性のものとされていたわけです。女性の伝統的な教養といったときには、それは女大学的なものであったり、あるいは芸事的なことであったり、あるいは今で言う家事に分類されるようなものだったと思います。その違うものを教養と言っていたときには、そこは住み分けていたので、「女性を排除するシステム」との相性はよかったわけです。

ところが、明治になって、全部が同じになるわけではないのですが、同じものができてきます。私は「男性が女性に教える」という話をいたしました。それはジェンダーロールということと、ジェンダー間の力関係に関わる問題です。男性たちにしてみれば、女性に対して自分たちが優位な立場——これは異性愛的な枠組みとも関係するわけですが——にいるということが心地よかったわけですね。わりと最近のことですが、「マンスプレイン (mansplain)」という言葉がアメリカ発祥で流行りました。マンスプレインとは、男の人が女の人に何かを教えたがったり、説明したがる、ということです。それは恐らく今日の教養主義という話題とも関連する、男性たちが男性優位の男女の関係性を築こうとする、ということだと思います。男性と同じ教養を女性に授けてしまうと、男性たちは自分の地位を脅かされると思う。だから、そのところを分けたいという欲望が、明治時代には厳然としてありました。ただしそこに反抗した女性たちが——私の説だと——文学からけっこう勇気をもらっていたのではないかと思います。男性が書くファンタジーから勇気をもらって、平塚らいてうのような女性が出てきたのではないのでしょうか。

『虞美人草』の藤尾についても、野上弥生子は「藤尾はいい」と書いています。夏目漱石は「あれは悪い女だ」、「だから最後に殺すんだ」と言っているのですが、野上弥生子は「藤尾さんにあこがれた」と後で言うわけです。そうした男女の捉え方の違いはあると思います。

蔵田：平石先生にはもう一つ、質問が来ています。

「『浮雲』におけるお勢の読んでいた英字のテキストが“女性向け”のものではなく、男性と同等であったということについて。そこから何がどう作用して、女性向けの外国語とか（教養化？）が出てきたのか？『女学雑誌』との関係など、(good wife/wise mother)の巧妙さなどが関係しますか？」

「また、『浮雲』のみでなく『藪の鶯』も教養ある女性はそうですが、女性を差別する、という構造についてどのように思われますか？」

平石：まず、一つ目のご質問についてです。ここは私も本当はもっと調べなければならないところなのですが、もともとは女性向けの英語のテキストはなかったということだと思うのです。だから『ナショナル』の『フォース』など、もともとは中等教育を受けている男性のためにあるものを、女性の一部も勉強するという形です。ただし、それを教えるのはそれを勉強し終えた男性という形で、そこに位相をつけていくということがあると思います。

でも、それが恐らくどこからか——そこはまだ調べていないので分からないのですが——例えば、高等女学校向けの英語のテキストみたいなものができてくるのではないかと思うのです。そのところはこれからやっていくと面白いのではないかと思います。そこでは当然、内容も……例えばスイントンは世界の歴史なわけですが、そうではなくて、例えばご質問いただいたような、まさに good wife/wise mother というものにかかわる形のテキストが選ばれていくということがきっとあると思います。それがいつごろから始まるかということは、私もこれから調べていかなければならないことだと思います。

もう一つ、『藪の鶯』についてご質問を頂きました。この作品については、「師である坪内逍遙が手を入れた」とも言われています。その中で三宅花圃がどこまで自主規制をしたのか、あるいは先生から言われて直したのか、そこは分からないのですが、三宅花圃自身のある種の限界といいますか、欲望は持ちながらもそういう女性たちが結局どうなったか、それを明らかにしないままで終わるしかなかったのが『藪の鶯』です。例えば、田村俊子の『あきらめ』でも、何だかんだ言いながら結局はあきらめる、というふうに物語が終わらざるをえません。そこは、その当時の女性たちがどこまで書けるかということともかかわってくるのではないかと思います。少なくとも三宅花圃はそれは書けませんでした。女性向けにしても書けなかったということです。それは当時の女性たちにとって不幸なことだったのかもしれません。ただ、早い段階でそういうものが出ただけでもよかった、と考えたほうがいいのではないかとはいっております。

蔵田：今回の企画にかかわる、かなり本質的なご質問が二つ来ていますがまず一つ目です。

「おそらく多くの方の質問が出るとは思いますが、『君たちはどう生きるか』が人気です。これも教養主義的な書物と考えます。『赤頭巾ちゃん気をつけて』等もそうですが——」

ところで、『赤頭巾ちゃん気をつけて』という作品を、若い学生さんはご存じでしょうか。1969年に発表された、庄司薫という作家が書いた小説で、ベストセラーになったのですが、今の学生は全然知らないという本です。

質問を続けます。

「——若い人への啓蒙文学は読者として女性を想定していないようです。今この時代に『君たちは〜』が受け入れられている理由についてお考えをお聞かせください」

今回このような企画を立てて4人の先生方にお話をお願いしたのですが、実は私自身が気になっているのは、『君たちはどう生きるか』にしても『赤頭巾ちゃん気をつけて』にしても、これらの作品は男の子はどう生きるべきか、しかもエリートの男の子はどう生きるべきかという問題を扱った作品だということです。『君たちはどう生きるか』の主人公のコペル君はエリート校の男の子です。『赤頭巾ちゃん気をつけて』という作品は、安田講堂での攻防に象徴される東大の紛争のせいで入試が中止になってしまったという状況で、東京大学を受験しようと思っていた主人公の男の子が大学進学をやめるべきかと悩むという話です。ここには、人はどう生きるのかという問題について考えるのは、そして人生について悩むのは男の子の特権なのかというジェンダー的な問題があるのではないかと思います。ところが、この企画を考えたときには予想もしていなかったことなのですが、『君たちはどう生きるか』はもう何十万部と売れているのだそうです。

では、なぜ『君たちはどう生きるか』が受け入れられているのでしょうか。先ほど、打ち合わせを兼ねたおしゃべりの中でいろいろなお意見が出ていたのですが、高田先生、いかがでしょうか。

高田：『君たちはどう生きるか』がなぜ売れているのか、私のほうこそ聞きたいという感じです。蔵田先生が「エリートの男の子はどう生きるか」とおっしゃっていましたが、コペル君も庄司薫君も家は大変お金持ちなのです。そこが重要なところですね。コペル君は高等師範学校附属の中学に行っていて、そこは当時からお金持ちの坊っちゃんの中学校だった。『赤頭巾ちゃん気をつけて』の場合は、社長の息子です。家にお手伝いさんがいる。『君たちはどう生きるか』と『赤頭巾ちゃん気をつけて』の構造は似ています。コペル君にはお父さんがなくて、お母さんの弟、すなわち叔父さんと、ノートを通して語り合います。薫君には年の離れたお兄さんがいて、お兄さんとその友人たちとの回覧ノートを覗いたりして知的刺激を受けている。『赤頭巾ちゃん気をつけて』は、『君たちはどう生きるか』をある程度意識しているのではないかと思います。そうするとここで重要なのは、恐らくコペル君はやがて東京帝国大学に行くと思いますが、男の子というだけではなくて、何もかもに恵まれたお金持ちでエリートの「君」がエゴイストにならないでどう生きるか、ということです。「ノブレス・オブリージュ」に関係してきます。

吉野源三郎も、お父さんが株屋さんか何かで、やっぱりすごくお金持ちなのです。東京高等師範学校附属中学出身ですから、自分のことをある程度書いていると思うのですが、そこで貧しい豆腐屋さんの同級生の話などが出てきます。吉野源三郎自身も治安維持法に引っかかっていますし、当時は1937年に日中戦争が始まってという状況で、どんどんどん世の中がおかしくなっているということを意識していた時代なので、現在売れている理由はそこかなと思います。時代がおかしくなりつつあるというところが、ちょっと似ている。あとは、読んでいて、あまりのブルジョワぶりに、バカヤローというか、チェッ!とか、本当にそんな感じがします。

本が売れるときには常に、何かどこかに大きな誤解が生まれて売れるのではないか。ですから、本当にこの質問については、どこに誤解があるのか、ぜひ教えていただきたいと思うぐらいです。

小平：阿部次郎の『三太郎の日記』なども、案外、今の学生に読んでもらおうと共感されるのです。こちらは批判するつもりで、授業などではややふざけた態度で読むわけですがけれども。作品では、「それぞれは個性を発揮しなくてはいけない」とか、それぞれの人が個性的になればなるほど普遍に近づいていく、ということなどを述べています。今に限らないと思うのですけれども、個性は発揮したいけれども社会から外れたくないという向きには、それぞれの人がそれぞれの人格を伸ばしていけば、みんなが個性的になるのだから普遍に近づいていく、といったことを言われると、非常に安心するのだと思うのです。

さて、社会では、従来は男性が制度の中で悩むことが多かったから、男子の「悩み本」というものが多くなっていて、女性のほうは、特定のところに入ろうと思っても入れないという社会制度のせいで、あきらめを持っている、つまり、できることとできないことは自分の中ではっきりと整理してしまうという癖がついていて、それであまり悩み本というのがないのだと思います。ただし、現在では女子学生も「私は受験の中でこうしてやってきて、『三太郎の日記』を読んだら、ちょっと共感してしまった」なんて言いますので、それはもうどんどん変わってきていることだと思います。

蔵田：お金持ちになった男性、あるいは親がお金持ちの男性がさまざまな因習から解放されて自分らしくなるということが教養主義の中心的なポイントだったとすると、その点は現代ではどうなのかということが問題になります。そこで最後のご質問を紹介します。これは、「だれでも」というご質問だと思います。

「『教養』が、近代化する日本で、上昇移動を果たした人々（男）の間での差異化の道具であり、メカニズムだったということだと理解した」

「一方で啓蒙主義以降の因習からの解放の契機をもたらす個人主義形成の力でもあるとすると、やはり今に生かせる文化的装置でもあるのではないか」

「ニューアカで教養が終わり、男による独占も終わったのか。であれば今ジェンダー的問題はあるか。むしろ世間的道徳と闘うのに必要になる??」

さて、いかがでしょうか。

平石：教養主義が男性だけに利をもたらしたのかというお話は、水溜先生のコメントの中でもありました。私も言いたいこともあるのですが、それについては後回しのほうがいいかもしれません。『赤頭巾ちゃん気をつけて』の薫君が共学の日比谷高校に通っているながら、日比谷高校の女の子の話が作品にほとんど出てこないことが、私は非常に面白いと思いました。高校は本当にホモソーシャルな世界であり、薫君のガールフレンドは別の学校にいて、お嬢様という設定になっているわけですね。

先生方のお話を伺って、私自身がいかに教養主義というものにどっぷりつかってきたか、そういう家庭教育なり学校教育を受けてきたのかということに、愕然としました。一方で、教養主義

というのはエリート主義とも大いにかかわってくると思うのです。エリート主義というものが打破されてしまった、今の日本や世界がいいのか、という問題です。アメリカでは今、知識人の言葉は信用されなくなって、それで今のトランプ政権があると私自身は思っています。しかし、それが果たしていいのかと考えたときに、私がどっぴりつかってきたからかもしれませんが、教養主義というのは悪いことばかりではない、やっぱり教養は大事だと思います。ただ、「人格形成に役に立つ」などと言われると、そもそも人格者になる必要があるのかという問題になってきます。私自身はそこには反対で、人格者になる必要があるかどうかは分かりません。それよりも、高田先生のお話にもありましたが、教養を身に付けることによって人の言うことを丸のみにしない、自分で考える力をつける——それはジェンダー差異がない形だと思うのですが——という意味での教養は、これからも非常に重要なものとして働くのではないかと考えています。

高田：私も、「括弧付きの学問」から離れて言うのですけれども、若い人たちには現在でも、男女にかかわらず、何かの殻を破って自分自身になりたい、解放されたいという気持ちがあると思います。それは若い人たちだけではありません。私は、今でも心は本当に18歳なのですから、年齢にも世代にも関係なく、何とかして「自分自身になりたい」という気持ちがあります。しかしこうした気持ちは、ある人となない人がいます。それは性格だと思います。一定数の割合で「教養」を求める者はいるのです。それが読書による教養なのか、自分自身の職業を見つめ続けることによる教養なのかよく分からないのですけれども、殻を破りたいという気持ちは生涯持ち続けるのだらうと思います。私も、いまだにいろんなものに怒ったり、チェッ!と言ったり、暴れたりして、い、「もっと大人になれよ」と自分に言っています。(笑い)

小平：同感です。教養が自分の頭で考えて周囲を批判していく力だとすると、知識も知的な訓練も重要に違いありません。ところが、それが教養主義として、ある地位の独占のような、あるいは資本の独占のようなものとつながるから、それが批判されるべきことになるということだと思います。

私も若いときは、今日お話しした、よけいな女子大生みたいなものだったと思います。自分のできも悪かったと思いますが、女子であること、専門が、外国語も古典もない日本の近代文学であったということ、私立であったことなど、社会の中での固定されたイメージが理由ではなかったかと考え、それらを明らかにする研究をしてきました。ただし今、それなりに大学の教授になりましたので、「そういう地位に安住して、おまえも『教養というのはやっぱり大事だ』と説くようになったのか」などと言われるのも嫌だなと思います。ですから、自分で批判していくような論文をさらに書き続けたいと思います。

それから、水溜先生が言われたのですが、私は、どうして中流以上の女子の話しかしないのか、と批判をいただくことがあります。下層の階級であっても、いや下層の階級であればこそ、何かを学ぶことの喜びというのは大きく力になることがあるので、今日のように学ぶことのネガティブな側面だけでなく、そうした研究の必要性を言われるのです。全くそのとおりで、今のところ私の能力と時間がそこまで追いついていないだけなので、今後はそういった方面にも領域を拡大して、いろいろと勉強していこうと思っています。

水溜：これまでの教養のあり方は、男性中心的、エリート的だったという点では批判されなくてはいいと思います。けれども、先ほどもお話ししたとおり、教養は、社会を批判的に見る力につながるという意味では、非常に重要なものだと思います。ただ、今日のディスカッションの中ではあまり触れられなかった点だと思うのですが、教養の内容にもジェンダーの偏りがあります。つまり、教養といったときに、誰もが思い浮かべる一連の作家、思想家、作品があると思いますが、こうした重要な人物や著作のリストには、大きなジェンダーの偏りがあります。つまり、私たちは今ある教養の中身を絶対化すべきではなく、ジェンダー的な視点から、あるいは階級や人種などの視点から批判的にとらえ直していくことも必要だと思います。ただ、今ある教養のスタンダードを批判的にとらえ直す力がどこから生まれてくるかという点、やはり教養を身につけることによって、というところもあると思います。ですから、教養のあり方をも含めて批判的に物事を見ていく力として、教養は非常に大事ではないかと思います。

蔵田：「学校の勉強なんかしない」ということが教養主義の特徴だというお話が高田先生からありましたが、われわれ50代の男性——男性とあえて言いますが——には「学校の勉強なんかしないけれども、教養主義も嫌いだ」というメンタリティーがあったと思うのです。学校の勉強をするのはかっこわるいけれど、「おれは教養があるんだぜ」といった態度も気に食わない。國分さんの文章の引用にもありましたが、「やはり大学が何も教えないというのも違うだろう」という意識がありました。ではその後に何が残ったのか。学校の勉強なんかしない。しかし教養主義も批判しなければだめだ——すると何が残るのかということになります。そもそも教養の本来の意味は自分自身を因習から解放する、自分がどういう人間であるかを発見するということだったはずですから、そういう意味では教養の力はまだ残っているはずです。また、今回はあまり扱わなかったのですが、水溜さんのお話にもあったような「教養の大衆化」という点で教養が果たした役割も、ポジティブにとらえることができるのではないかと思います。

今日は長い時間、皆さんどうもありがとうございました。今回のシンポジウムについては、記録を残して、インターネット上でも公開したいと思っています。

それでは最後に、本学文学研究科の山本研究科長から挨拶をお願いします。

閉会の挨拶

山本：3人のパネリストの先生方、今日はどうもありがとうございました。またコメンテーターの水溜先生、ありがとうございました。

今日は最初から話を聞いておりましたが、大変刺激的でいろいろ勉強になりました。そこで、幾つか思い出すことがあります。例えば、啓蒙主義の話が今日は随分ありましたけれども、「道徳週刊誌」という有名な雑誌があって、そこに「学のある女性」という有名な挿絵があります。博士号を持った女性が家庭にいて、自分の勉強ばかりしていて家の中はくもの巣だらけ、だんなが自分で食事を作っていて、子供が裸で走り回っているという絵ですが、そういうことを批判するための挿絵なわけですね。私は西洋史が専門なので少しお話しさせていただきますと、男女の役割

を「カギ括弧つきの科学的な根拠」で仮定していくという作業を、啓蒙主義の人たちは一生懸命やったわけですが、20世紀以降の多くの人たちがそこから解放していく役割を果たし、今もその途上にあるということを、皆さんの話を伺って改めて感じました。そして最後に、教養とは何かということを考えさせられました。

最近、北大でもそうなのですけれども、教養教育を復活させなければいけないと言われていいます。そうしたこともあって、教養とは一体何かということを私も日々考えています。今日はいろんなお話を聞きながら、新しい時代に向けての、今の時代における教養とは何かということを、教養主義ということを離れてぜひ考えていきたいと思います。そういう意味で非常に刺激的で多くの情報を頂き、3人の先生方に心から御礼申し上げます。また多くの皆さんにお集まりいただき、研究科を代表してお礼申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

閉会

蔵田：本日は長時間にわたり、まことにありがとうございました。センター関係者一同、心より御礼申し上げます。

本日は雪も積もっており足元が大変悪いので、お気をつけてお帰りください。ご来場、まことにありがとうございました。(拍手)



上段左から 今井順、柴田絵里佳、近藤智彦、瀬名波栄潤、増淵隆史（以上、応用倫理研究教育センター）
下段左から 蔵田伸雄、水溜真由美、平石典子、小平麻衣子、高田里恵子、山本文彦（敬称略）

応用倫理 ― 理論と実践の架橋 vol.10 別冊
教養とジェンダー

2018 年 3 月 31 日発行

編集責任者

増渕隆史

編集委員

蔵田伸雄、近藤智彦、田口 茂
村松正隆、山田友幸、宮嶋俊一

©2018 応用倫理研究教育センター

ISSN 1883-0110

〒 060-0810

札幌市北区北 10 条西 7 丁目
北海道大学大学院文学研究科
応用倫理研究教育センター

Tel : 011-706-4088

E-mail : caep@let.hokudai.ac.jp

URL : <http://caep-hu.sakura.ne.jp/>